

ふるさと霞ヶ浦を中心とした周辺地域の歴史文化の再発見と創造を考へる

ふるさと風

第126号 (2016年11月)

風に吹かれて (104)

白井啓治

・老いぼれて瘋狂を妄想するも忘える声もなく

9月号で、むのたけじ氏を偲んで、「どのような状況であっても、自分を発言することを止めてはいけないし、忘れてもいけない」と書いたのであったが、その時の文を鈴木健兄が読まれ、「落ち穂拾い」と題した石岡、高浜の地名に関する原稿を頂き、10月号に紹介させていただいた。そして、今月号にもその第二弾を投稿頂いた。実に嬉しいことである。

嬉しいことは続くものである。先日、美浦村の市川紀行兄よりメールをいただき、「陸平をヨイシヨする会」が20周年を迎えるという。当ふるさと風の会が10年を迎えたと、感慨を持ったのであったが、その倍の20年月の活動である。大先達であり、当会の範とすべき会である。

ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を掲げる当会ではあるが、陸平をヨイシヨする会の活動の大きさを見ると、口ばかりは達者だけれど、と自省させられる。人気度ワーストワンの県ではあるが、どっこい俺たちが居るぜ、と声を大に自慢できるふる里ヨイシヨの会である。

9月号でも述べたが、私たちは自分を発言することを忘れてはいけないし、誰かの発言を認めたら、意欲と知恵をもってその発言に耳をかし、その発言に愉快することが大切である。ふる里を発言し皆で愉快する陸平をヨイシヨする会へスタンディングオベーションしたい。

ふるさと風の会、劇団ことば座を始める時、ふる里とは「物語の降る里、恋の降る里」と定義し、進めてきたが、市川兄等が活動はまさに物語の降る里活動であろうと思う。

劇団ことば座では、この地をモチーフにした常世の国の恋物語百を降らそうと、人材の集まらない中で10年36話まで進めてきたが、恋や物語は種を蒔かないで生まれ降ることはない。

蒔くべき種をあちこちで採取し、書き留めておくのであるが、採取した種が蒔ける種かどうかはしばらく保存し、発芽するものかどうかを見極める必要がある。この地のあちこちを見聞しながら雑草のような種を採取するのであるが、物語として発芽するかどうかは、ノートに書き留めしばらく放置しておくのが一番である。時々、ノートを開いて発芽の気配が現れたかどうか確認するのはライターにとっては楽しみの一つである。

風に吹かれて拾った種とは、こんな風なもの

ある。：

(某月某日某地)

私は恋に焦がれたただの老いぼれ。

老いぼれた男の感傷なんて醜いだけ。

老いぼれた男は思った…。

川の水面に映った月の姿は

どうして

流されて行かないのだろうか。

それをただの当り前と考えて、不思議に思わない人には、切なくて居たたまれない恋の心は解からないのではないだろうか。

そんな事を考える私って馬鹿ですか。

湖の水面に映った月の姿は

どうして

沖に流されて行かないのだろうか。

そんなこと当り前じゃないかと言うあなた。

いま恋をしていませんね。

どんなに悪臭のたつ濁った水でも

月を映して遠くから眺めると

汚れも悪臭も消えて無くなってしまふ。

夜の月は

夜の星たちは

いつでも潔白なこたえしか持っていない。

…こんなただの名もない雑草の種が、思わぬ花を咲かす種になるのだろうか、と想ったりするのだが、こんな乾いた雑草の粒の一つが、不思議な芽を出し、驚くような美しい花を咲かすことがあるものである。

左記の種が芽を出すかどうかはわからない。大きく期待することはないが、見捨てることもしない。さてこの種どうなるものか。

我々の先祖を辿れば、想像を超える太古の昔から今日まで、連続と繋がっている。現在の人類を理解するためには、哺乳類・霊長類となった直近の先祖だけではなく、太古の祖先にまで思いを巡らす必要がある。なぜなら生理・解剖だけではなく、心理的基礎も、野生動物としての太古の生活習慣に遠因があると思われるからである。

地球が誕生して46億年。生命が海の底で誕生しておよそ40億年。生物は30億年も単細胞時代を経て、今からやっと10億年前に多細胞生物へと進化した。海水は海底火山の噴火などで強く酸性化し、全生物の9割近くが絶滅する大事件を何度も繰り返した。辛うじて生き残った者が、現在の生物であり、遂に陸上にまで進出する次第となった。

太陽からの紫外線は、生物のDNAを破壊する。

(緯度の低いオーストラリアに白人が住めば皮膚がんが多発するのはその一例。)しかし、海中にあれば海水が命を守ってくれる。海中の植物が何億年もかけて繁茂し、炭素同化作用で吐き出した酸素原子が3個くっついたオゾンが、地球上空で層を作るようになる。太陽の紫外線をかなり吸収してくれる。そのおかげで、生物は陸上に進出してもDNAが破壊されなくなるので、まず植物が上陸し、追って動物も陸上に進出する事になる。

【私が近代文明を、「偽の文明」とこきおろすのは、その大事なオゾン層を、フロンガスやその代替物で簡単に破壊するような「超愚行」を、平気で言う人類の無思慮を戒めたいからである。】

さて我々の先祖を考える時、脊椎動物の魚類がまず海水から淡水へと進出し、川を遡って浅瀬な

どで、魚類は鰭(ひれ)を「足」に、鰓(えり)を「肺」に進化させ、「両生類」が誕生する。そして両生類は爬虫類に、爬虫類は哺乳類へと進化の道を駆け上る。ところが哺乳類の誕生は、これまでの学会の通説は、爬虫類の全盛時代、今から2億年前、爬虫類の一部が恒温の哺乳類となり、ネズミくらいの大きさを、恐竜の攻撃を逃れるため、夜行性で、ひそやかに生活していた：となっていた。しかし最新の研究によると、哺乳類の誕生は、2億年前であり、恐竜が滅亡する6500万年前には、すでに体長1メートル以上の哺乳類もあり、その化石の腹部から、なんと恐竜の子供の骨が出てきた事実が報告されている。

【余談：以前、読売新聞のアマチュア写真家応募の年間最優秀作品は、茨城県のカメラマンで、散歩の途中、なんと大きなガマガエルが、蛇の子供を、半ば飲み込んでる所をパチリ：であった。即ち、両生類が爬虫類を飲み込んだのである。】

*

さて、私はこの会に入会以来8年余、人類の祖先は、どこで生まれ、どのような道のりを歩んで今日に至ったかについて、『遙かなる旅路』と題し、連続100か月に渡り述べてきた。途中、何度も余談・脱線はあったが、それも所詮は人類という生物の「生きざま」の姿であり、「旅の一部」として纏々述べてきた。そして前半50回分の作品を2012年に、後半50回分を16年に、それぞれ、上巻・下巻として纏め、刊行した。

いつも私が吼えまくるのは、人類とて決して自然界の特別の存在ではなく、神様に近い聖なる存在でも何でもない。むしろその反対で、後から膨らました大脳皮質による理性や倫理など、そっち

のけ。いつも、大脳深部に鎮座し、本能を支配する基底部が幅を利かし、己の「利」を第一と考え、利己的に動くのが、人間の本性だと考えざるを得ない。小は近隣との境界線を争う縄張り根性。それが嵩じれば、大は何度も繰り返してきた戦争の数々。人類の歴史とは、正に争いの連続であった。動物がマーキングをして己の生活の場を確保し、他の侵入を許さない。これは単細胞の微生物から、高等生物までみな同じこと。孟子の「性善説」が正しければ、その子孫である現在の中国の色々な行動は、なんと説明すればよいのか？ 国際仲裁裁判所の判決など、全く無視している。

ドイツの諺に、「法律とはクモの巣のようなものである。ハエは捉えられるが、カブトムシは突き破って通り抜けていく」：と。どこからどう考えてみても、基本的には人類が長年歩んできた基本姿勢は、「己の利」の追及である。利己的な遺伝子に支配された、極端に言えば「オレさえ良ければそれでよい」という事になる。(こう批判する私自身も、決して聖人君子にあらず。深層心理のどこかに、利己主義の断片が見え隠れする。)このように人間行動の設計図である利己的な遺伝子には、はつきりそう書いてある。偶(たま)に、わが身を捨てて他人の命を守る美談が新聞に載ったりするが、極めて稀な現象である。

話を变え例えれば今、我々は足の長い、縊(くび)れた腰の美女を見れば、これぞ神様の創りたもうた最高の芸術作品などと称賛する。しかしその深層心理は、700万年前、木から降りて直立二足歩行を始めた頃、肉食獣の餌食となるのを避けるため、より長い脚で、遠くの天敵をより早く発見し、素早く逃げる事が肝心で、一にも二にも最重要な事。

美しきもの：それは実用の先に存在する。

同じく腰の縊れは、雄から見れば、あの雌はまだ妊娠していない。もしかしたら、オレの子供を宿してくれるかもしれない：という本能的欲望が美的観測となり、憧憬的となる。即ち美しい物とは、憧れを適えてくれる現実であると言いたい。そういう事の積み重ねが、深層心理として今日の美的感覚の基盤をなしていると考えざるを得ない。決してルネッサンス以降の芸術の目覚め：などというものではなからう。その生物が何千万年・何億年と歩いてきた積み重ねが、今日、我々の深層心理の基礎となつているのである。

*

さて今回、11月号の原稿を書くにあたり、何を書いたら良いか、よくよく迷っていたら、10月3日夜、今年のノーベル賞生理・医学賞は、東京工業大学栄誉教授大隅良典博士に決定とのニュースが舞い込んできた。授賞内容は、細胞が自らタンパク質を分解してリサイクルする「細胞自食作用（オートファジー）」の仕組みを、遺伝子まで特定して解明した功績に対するものであった。

このニュースを聞いたとたん、私がピンときたのは、アフリカで一番腹を空かしている猛獣は、ライオンである：といわれているが、百獣の王といわれながらも、狩の成功率はわずか10%ともいわれ、1週間、何も食べない時もあるといわれる。なぜそんなきつい事が通常行われているのか？真に不思議に思っていた。それが酵母という単細胞内において、不要となったタンパク質のゴミをアミノ酸にまで分解し、リサイクルする巧妙な手法を、下等生物から、高等生物まで一貫して行われている。即ち何億年も前の生物が開発した生存

手段を、今の生物が生きる基本として活用している。こんな奥の手がなければ、生命の維持が難しい。それほど生き物が自らの命を継続し、子孫を残していくということは大変なものである。それゆえ「食」に対する固執、即ち縄張りの主張・利己主義の貫徹が、いかに重要な事であるかを物語る。私はいい年をして、人間が利己的に行動する醜い行動を、動物と何も変わらない低級なものとして揶揄してきたが、それほどに、生物が自然界において己の生命を維持するのが大変な事だということ、オートファジーの理論から教わった気がしたのである。ゴミの再利用は生命誕生以来40億年も前から生物がしっかり経験してきた事なのだ。特に肉食動物が、エサにありつけなくとも1週間も生きていくシステムは、このリサイクルにあつたのかと、今更ながら知らされた思いである。

このような諸々を見ると、人類の本性に潜む残酷性とか、自己中心的な「縄張り根性」は、恐らく生命誕生以来、生き物の本性として備わっているものと思われる。両生類・魚類どころか、単細胞の時代から、生き物は周りに栄養やエネルギー源をかすめ取って生き続けてきたのである。それゆえ、生物とは、己のDNAの維持継続。即ち、新陳代謝で己の成長を全うし、成長すれば、子孫を残す事に全てをかけるように仕組まれた「ばね仕掛け」のようなものではなからうか。

*

台風やハリケーンの猛威は、地球の温暖化をもたらした人工的な数々の愚行の結果であると言えらる。ならば、もし人類に「真の智慧」というものがあるのならば、現在の生活習慣の一部を改善し、即ち全人類が、毎日の衣食住に関する消費を10%節減し、リサイクルで補完すれば、たちまち環境は大幅に改善され、地球温暖化のスピードが鈍くなるであろう。紋切り型の経済成長率ばかりが能くはあるまい。文句ばかり言つて対案を提出しないのは、どこかの国の、何とか言う政党の特許みたいなので、意を決し、私なりに提案するならば、衣食住の消費を、全人類がわずか10%節減すれば、地球環境はかなり改善されると思う。

人がやらない事をやる。これが大隅博士の持論である。細胞の中で不要となったゴミの処理などどうでもよいような事であるが、それが蓄積すれば、パーキンソン病になったり、がんになったりするとの事。ライオンもこのリサイクルで飢餓を克服しているに違いない。すぐ役立つことなくとも、科学の基礎研究がしっかりしていなければ、物事が前進しない。今すぐ役立つ事にしか、研究費が充たされないのでは、力強い科学立国とは言えない。真似をすればよい。他人の技術は盗めばよい。：。これでは真の文明国ではない。新幹線技術は中国で開発したものである：として世界に売り込んでいるが、思ひ上がりの発言も休み休みにしてほしい。それにしても、日本が毎年のようにノーベル賞を戴けるのは、真に喜ばしい限りである。

*

さて本論。我々の遠い先祖「両生類」のルーツについて、じっくり観察を加えてゆきたい。そもそも両生類は、本来「両棲類」と書くのが正しいが、「棲」の字が常用漢字にないため、「両性類」と書いている。これも変な話ではないか。

魚類が進化して両生類となるのは^{3,6}億年前である。両生類は陸でも水でもどちらでも住めるという意味ではなく、両方とも必要という意味であ

る。概して言えば、卵から幼生期は水が必要であり（尾で前進・鰓で呼吸）、陸に上がれば、例えばカエルを例にとれば、尾を捨てて足で歩行・鰓を肺に変換して呼吸する。

両生類は3種類に分けられる。

① 有尾目…長い尾に短い足がある。サンショウウオなど。鼓膜と中耳を持たず、肺もなく皮膚呼吸のみ。どちらかといえば、水中及び地中生活をする。変わり者は、アカハライモリはフグと同じテトロドトキシシンという猛毒を持つ。またイベリアトゲイモリは、体側から鋭い肋骨を突き出し、身を守る。更にイモリの一部は、卵管中で孵化成長し、先に孵化した者は後から孵化したきょうだいを食べて成長し、胎生で生まれる。アカハライモリは、日本では「惚れ薬」。

北大路魯山人はその美味さをスッポンとフグの合いの子と言いつつ称賛したという。オオサンショウウオは漢方で「強壯剤」或は「肺炎の薬」。

② 無尾目…カエルに代表される。

幼生は水中で四肢はなく、鰭のついた尾を持つ。成体の胸は丸く、尾や肋骨はなく、大型のカエルは小型哺乳類やへびをも食べる。気嚢や横隔膜もないので自発呼吸ができなく、わずかな肺呼吸と、殆どは皮膚呼吸で生きている。大方は肉食性で、海水には棲めないが、汽水域に棲む種もある。またある種は、体内受精で、子蛙やオタマジャクシの形で子供は生まれる。

③ 無足目…アシナシイモリに代表される。地中又は水棲で、現生両生類中、最も原始的。ミミズやへびに似ている。中南米には胎生で最大15cmの大形種もいる。頭骨及び尾が失われ、吻端の諸骨が融合し、穴を掘る。環帯の間にある皺（しわ）を

収縮させて地中を進む。外敵に襲われると皮膚から大量の粘液を分泌して相手からすり抜ける。更に毒液を出す種もある。殆どの種は胎生で、胎児は変態を終えてから生まれる。

*

その他、両生類に関し、特徴的な項目…

◎変温動物であり、温帯以北では冬眠する。

◎動物の四肢の起源は、魚類の鰭（ひれ）が変化したもので、指の数は、鰭条6本が基本である。両生類から爬虫類へ、更に哺乳類へと進化すると、指の数は大方5本となるが、現在の人類において、トルコでは、指6本の人が稀ではなく、イギリスのチャーチル首相は、手の指が6本であったという。

◎最新版日本の爬虫類・両生類レッドリスト…爬虫類56種・両生類36種。

両生類は古生代の石炭紀以降で、脊椎動物として初めて（3億年前に）陸上で生活するようになったが、水辺を離れる事はできなかった。近年両生類は減少甚だしく、カエルツボカビ病（致死率90%）の感染症や、吸虫の被害の他、粘膜に覆われた脆弱な皮膚、環境変化への対応困難などにより、個体数を甚だしく減少している。一説では100年以内に「目（もく）」としての絶滅が危惧されている。

*

私はこれまでにこの会報で、何度となく述べてきたのは、生物の種を絶滅させるまでに、環境を汚染したり、資源を枯渇させてはいけない。人類にだけ、他の生物を絶滅させて良い特権など、絶対に有りはしない。このような事を繰り返せば、当然人類の寿命も短縮する事になる。地球

の人口収容能力は、50億人と言われる。しかし現在、毎年8500万人ずつ人口は増え、すでに73億人に達している。今世紀末には確実に100億人を突破する事だろう。環境は汚染し、温暖化は進み、台風やハリケーンは、数も強度も増している。その被害は年々増加傾向にある。

人類は、万物の霊長とか、大口をたたいて威張りたいのなら、まず自らの人口をしっかりとコントロールし、貧富の差をなくし、世界中、皆が平等に生活できるように、直ちに基礎固めをするべきだ。国連はどこかでアウトローがとんでもない事をしでかすと、非難決議を採択した…などと報じられるが、そんなのは、問題解決なんの役にも立たない。無法者はそれを知っているから、やりたい放題。国連はしっかり実力行使をして、不正義は懲らしめるべきである。

個人攻撃で恐縮だが、現国連事務総長の韓国出身潘基文氏は、今年いっぱい10年務めたその職を去るが、その間、あまりにも評判の悪さに只々驚く。韓国人を多数国連事務員に採用し、母国を特別扱いする。中国の抗日戦争勝利記念のパレードに昨年出席し、拍手を送っている。中立公平の立場にありながら、歴史認識問題では常に日本側のみ深い省察を要求する。次期韓国大統領を狙っているというが、片寄った言動は、そのための布石か？

国連は、無法をほしのままにしているIS、中国、北朝鮮など、対応を誤ると、とんでもない結果を招く恐れがある。病根は拡大しないうちに、きちんと断ち切るべきである。

・吉田松陰の銚子見物

吉田松陰といえ、山口県萩か東京がその関係地として浮かぶが銚子にも来た記録がある。それは松陰が23歳の時に脱藩の罪に問われた東北遊学の時である。

吉田松陰は山鹿流の兵学の勉強をかなりしていた。私のいる石岡もこの山鹿素行が赤穂藩に塾居させられた時に書いたとされる「謫居童問」に、常陸府中城は陸奥の多賀城、筑前の怡土城と並ぶ日本三名古城といわれる堅城であったとかれているといふ。

山鹿素行は会津若松に生まれた。そしてその後山鹿流兵法は、九州平戸に踏襲され、松陰はこの平戸に出かけている。そこで知り合った山鹿流兵学者であった宮部鼎蔵(みやべていざう)と意気投合して東北に行くことを盟約した。ところが出かける予定になっても通行手形の藩札が間に合わず、手形を持たずに出かけて脱藩したとみなされた。

この宮部鼎蔵はその13年後に池田屋事件で新撰組に襲われ、自刃した人物である。

東北遊学では松陰は4ヶ月間にわたって北の外れまで足を延ばして見聞を広めた。

一体どのようなものだったのだろうか。松陰はかなりこまめにこの時の事を「東北遊日記」に書いている。(文は全て漢文である)

この日記によると、嘉永4年(1851)12月14日に江戸を出立し、水戸街道を進み筑波山などに寄りながら水戸に行った。水戸ではいろいろ滞在してあちこちにも出かけている。

そして、1月5日古奈地(子生)から汲上にてで

海岸の砂浜を歩いて鹿島に行った。そして潮来、牛堀を経て、船で刀根川(利根川=常陸利根川)を銚子に向かった。牛堀から船にのるが、息栖でもう夕方になり食事をとるために一旦船を下りている。東国三社といわれた息栖神社に立ち寄ったかははっきりしないが帰りにも来ているので恐らく行ったのだと思う。そしてそこからまた船に乗り銚子の手前の松岸に到着した時はもう二鼓だと書いている。二鼓は夜を2時間ずつ5つに分類した2つ目の時間というので今の夜9時過ぎくらいだろうか。松岸で宿泊し、翌日銚子に徒歩で出かけてまた松岸に戻って泊まった。

当時、松岸には何があったのだろうか？ 銚子は漁港ですが松岸は利根川沿いの港町だ。良くこの場所に通っているが、今は特に何も無いように見える。松陰は、銚子見物の帰りは息栖、玉造でそれぞれ1泊して水戸に戻った。銚子に行く時に松岸の船着き場を下りて、銚子へ行くのは当時としては普通だったようだ。

1月5日〜8日(水戸〜鹿島〜潮来〜牛堀〜息栖〜松岸〜銚子)
1月8日〜11日(銚子〜松岸〜息栖〜玉造〜水戸)

・松岸には温泉・遊郭があった

現在、銚子駅の1つ手前の駅に「松岸」駅がある。総武本線と成田線がこの松岸駅手前で一緒になり銚子駅まで伸びている。

この松岸に何があったのかを探るために、昔、利根川の船着き場があったと思われる辺りを散策した。そこで目に入った「石毛川魚店」という看板を見つけて路地を入って行った。

この川魚店は思ったより大きなお店で天然ウナ

ギのかば焼き・白焼きを売ったりしている。この川魚店の前を通り、川岸に出た。

河岸はコンクリートのブロックなどで固められ、モータースクール?などと書かれた看板があり、受付の小屋もあったが、誰もいなかった。

川辺に「ここから下流側ではじみ漁を禁止する」立札が立っていた。ただ、手で掘るのは良いのだそうだ。何となくこんなものも面白いと感じた。

対岸は茨城県神栖市だ。川の上流を眺めた。ここを吉田松陰などは川を下ってきたという。

そして夜9時頃にこの港に着いた。時期は旧暦1月(今の暦では2月?)で寒い時だし、夜も早く暗くなっていたと思うのだが…。

その当時は、この港は賑やかだったのだろうか？ そんな事を思いながら誰もいないまわりを眺めて見た。松陰たちはここで泊まって、翌日は歩いて銚子に向かった。銚子までは約3〜4kmであるのでそれほど遠くは無い。

さて、陸側には昔何があったのだろうか。今は「石毛川魚店」の看板が屋根に立てられた家があり、その裏側に大きめの駐車場がある。

この駐車場の先に、このあたりにはまったく不似合いなきれいな結婚式場の建物が聳えている。調べているうちに少し昔の様子が見えてきた。

この駐車場がある場所にこの東日本大震災まで「銚子温泉 青野屋旅館」という温泉施設があったという。昔は銚子温泉と言えばこちらの方だったのかもしれない。「自然湧水 ラジウム」などと書かれた看板があったそうだ。この辺りでは珍しい硫黄の臭いがする湯だったという。

そして昭和16年までこの場所に「松岸遊郭」が

あつたのだそうだ。この遊郭はかなり規模も大きくて江戸時代は随分華やかだったようである。

昭和初期までは「芳流閣」や「竜宮城」などという大きな妓楼があり、港からの客を呼び込む施設もあり、芸妓たちの住む場所などもあり、潮来よりもにぎわっていた時期もあつたということも見えてきた。

今ではもうまったくそのおもかげはなく、想像すらできないほど変わってしまったている。松陰の日記には何も書かれていないが、この松岸で2泊している。松陰のことを調べなかつたらきつとこの松岸は何もわからずにいたかもしれない。

車で少し脇道には行つたら道路は行き止まりになつた。戻つて昔の海岸付近の様子が少し残る家並みなどを探してみても回つた。ただ路は狭くあまり歩きまわると不審者に見られそうな感じだ。

その街中に小さなお宮が置かれていました。

何か昔のことを語ってくれそうなそんな気がした。芸妓達もお参りしていたようなそんな姿が浮かんできた。

・銚子川口神社で松陰は何を見たのか

さて、松岸から吉田松陰たちは1里離れていた銚子の先端の方までやつてきた。その銚子港の外れの山側に「川口神社」がある。この神社は安倍晴明伝説が伝わる神社として知られている。

この神社の登り階段の途中に吉田松陰の石碑が置かれていた。

「松陰先生曾遊之地」の石碑で、裏には松陰が東北遊日記に書いた漢詩が彫られている。

この詩はなかなか読むのも難しそうだが、ネットを検索していたらこの詩を訳したサイトを発見

した。肝心の最後の方の一部を転載させていた

何人復有審敵作

仄聞身毒与満清

宴安或被他人掠

杞人有憂豈得已

閑却袖中綏邊略

強開樽酒発浩歌

滄溟如墨天日落

何人か復た審敵(しんてき)の作有らん

仄(は)のむに聞く身毒(しんどく)と満清(まんしん)

宴安(えんあん)すれば或は他人(た)の掠(りやく)を被らん

杞人(きじん)憂あり豈(あ)に已むを得んや

閑却(かんきやく)袖中(しゅうちゅう)綏邊(すいべん)の略

強(た)いて樽酒(どんしゆ)を開いて浩歌(こうか)を発すれば

滄溟(そうめい)墨(すみ)の如く天日(てんじつ)落つ

(解釈)

インドや満州族の清朝(中国)の事をそれとなく聞くが、安逸を貪っている他国に侵略されるだろう。心配症の者が要らぬ心配するのは已むを得ないのか、否そんな事はない、辺境の敵を防ぐ対策が何もなされていないか無理に樽酒を開けて大声で歌えば大海原は日が落ちて墨を流した様である。

吉田松陰はこの地に来て、このような日本の状態では敵国に侵略されてしまうと大変危惧していたことがわかる。

こんなに無防備では何時侵略されてもおかしくないといっている。すでに他国のうわさも聞いて

いたのでしよう。

この石碑の最後に浜口儀兵衛謹書と彫られている。現在のヤマサ醤油の代々続いてきた当主が浜口儀兵衛であるが、この松陰がこの地を訪れたのは嘉永5年(1852)1月8日(旧暦)であるので、この時は7代目浜口儀兵衛の代で、浜口家の分家から本家に入つて家督を相続した人物だ。また「稲むらの火」で知られた人物だが、こちらの石碑に彫られた書は10代目の浜口儀兵衛が書いたようだ。この10代目もイギリス留学で醸造技術を習得し醤油王と呼ばれるまでに現在のヤマサ醤油の近代化を進めた人物といわれている。

この石碑が建てられている場所から銚子港の方を見下ろすことができる。街並みとその先に港が見える。ここは利根川が海に注ぎこむ河口です。

松陰が訪れた時にはどんな様子だったのだろうか。銚子で水揚げされた魚は利根川を經由して江戸の市場に運ばれていた。

夜に出た魚は翌朝に布佐から陸路を松戸まで運び(なま街道、江戸川を下つて次の朝には江戸の市場に並べられていた。1日半くらいの日程だ。)

当時はこの港もかなり活気を帯びていたと思う。しかし松陰には外敵を考えていない庶民たちを見て、この国が心配になったのだろう。

・海上八幡宮

吉田松陰らは銚子を見学してその日はまた松岸に戻つて泊つた。当然銚子の観音近くや港街にも旅館はあつたはずだ。松岸に遊郭以外にも何かあつたのだろうか？

この松岸に近いところにある古い由緒ある神社として「海上(うなかみ)八幡宮」がある。

松陰がここを訪れたかどうかはわからないが、芭蕉や一茶も訪れているので、立ち寄って見た。古い芭蕉の句碑があると知っていたので探した。

芭蕉の句碑は、長く伸びた神社の参道入口に目立たない石碑がそれであった。何と書かれているかも判別できない。ネットで調べてみると、「海くられて 鴨の声 ほのかに白」と野ざらし紀行に載っている句が彫られているそうだ。この石碑が建てられたのは文化2年(1805)だというので今から200年以上前だ。しかしこの句はここで詠まれたものではなく、貞享元年(1684)12月に名古屋の熱田で詠んだものだという。

(尾張の国あつたにまかりける比、人々師走の海みんとて船さしけるに 海くられて鴨の声ほのかに白し)

芭蕉の句が読まれた130年後小林一茶がこの地を訪れた。

「遊女めが見てケツカルぞ暑い舟」(七番日記) などという歌を残している。(ケツカルは俗語で「見てケツカル」は「見ている」といった程度の意味。)

また句が読まれたのは旧暦の6月というので今なら7月の梅雨明け時頃という。情景が目につかぶ。また利根川凶志を書いた赤松宗旦もここを訪れている。この神社は大同2年(807)の創建といわれていて、本殿は千葉県指定有形文化財天和3年(1683)建立と推定される。

・長者山

もう一つこの松岸に近い場所に長者山という場所がある。ここには現在「長者山仁王尊阿弥陀院」という寺が建っている。

また境内に「長者屋敷跡」の石碑が立っている。ここに1000年以上前に海上郡一の長者が住んでいたという。

そして常陸の明野から、この屋敷に来ていた安倍晴明とこの長者の娘との結婚話が持ち上がった。しかしこれを嫌った清明が逃げ出した。海に飛び込み自殺したように見せかけた清明の後を追いかけて、娘は海に飛び込み死んでしまった。その娘の歯と櫛が流れ着いたのが、先に吉田松陰の碑が置かれていた川口神社(昔は齒櫛神社・白紙神社)だそう(伝説)

寺の境内に「胖庵先生遺徳碑」という石碑が建てられていた。調べてみると石毛胖庵という人がこの長者山阿弥陀院に明治7年に「長者学舎」という学校を開き、それが今の銚子市立海上(うなみ)小学校となったという。今の学校はこのすぐ隣にある。

・伊達巻

松陰の通った跡を探っていると、いろいろなところが見えてきた。そのことを知らなければ感じない町並みなども、今では全く別なものに思えてくる。松岸駅の近くの旧道沿いに「なべや鮮魚店」という魚屋があり、立ち寄った。

ここでの目当ては「伊達巻」だ。銚子の伊達巻は有名で甘くて大変美味しいという。銚子の街の方では寿司屋で伊達巻を出している。

太く半円形に巻いた伊達巻を寿司ネタのように使っている。ここは普通の伊達巻形状であるが、1本長いもので1200円、半分にしたものがその半額だ。半分のを買って、家に帰ってから食べたが、これがなかなか美味しい。

幾らでも食べられそうだ。甘すぎもせず出汁の味も良く効いている。大分昔からやっていそうなお店なので女将さんと少し話をした。

「このお店は何時頃からやっておられるのですか？」

「もう私で4代目ですよ」

「この松岸も昔は港があって賑やかだったようですね」

「このお店も前は川魚を専門にやっていたのですが、鯉ヘルペスで鯉がダメになって海の魚に切り替えて今は海の魚を扱っています。」

「そうですか。確かに川魚のお店がこの先にもありませんね。あの辺りには遊郭や温泉もあつたそうですね。」

「そうですね。今結婚式場がある前の駐車場のところに遊郭などがあつたんです。10年ほど前に90歳でなくなつた家のおばあちゃんも昔の話を良くしてくれました。それによると、この店の前の通りをすつごく綺麗な着物を着て、女たちがねり歩いていたらさうなの」

「毎日？」

「そう 毎日ね。綺麗なおべべ着て…ふふふ…」

「川の護岸もコンクリで昔の面影はないですね。」

道もせまくて、行き止まりもあつて、…」

「そう。この家の通りの向こう側(川側)は皆、やぐざばっかりだったんですよ。」

お話を聞いていたら、昔の姿が目の前に浮かんできました。女将さん、お話ありがとうございます。ごさいました。

当会報ふるさと“風”は、去る十月一日石岡市民の日にちなんで、石岡市協働のまちづくり表彰「ふるさと文化の発展に貢献」を受賞致しました。

これはひとえに皆様の熱心なご愛読の賜物と心より御礼申し上げ、ここに「ご報告いたします。これからこの受賞を励みとして精進して参ります。変わらぬご愛読とご支援の程よろしくお願いいたします。

さて現在、平成二八年の新石岡駅は、明治二八年開業時の石岡駅の一部を残し、すっかり様相を変え、二九年三月工事完了予定に向けて交通規制の中進められています。また、石岡市ふるさと歴史館一階企画展にては「**鉄道の時代に描いた夢、明治と昭和初期の鉄道計画と石岡の先人たち**」と題して平成二八年八月三日〜十一月二七日迄行われています。

展示されて一か月余りになりますが、鉄道マニアの皆さんや、東京、栃木、群馬、千葉、など関東一円よりの方々、そして石岡市内の皆さんは「歴史館には初めての入館です」と石岡の歴史に触れる事が確実に増えています。ふるさとの歴史を知る事が一番の街おこしとなることを信じている私にとりまして、「来月十二月からはまた別の、石岡の宝物が展示されますので又いらして下さい」とお見送りする時が再会を願っての嬉しいひとときとなっております。

明治から昭和初期の時代、酒や醤油の醸造、米雑穀商、砂糖卸商など豪商の方々の町発展のために尽力なされた事や鉄道建設に力注いだこと、水戸鉄道と常総鉄道の争い、鹿島参宮鉄道と霞浦鉄

道、まぼろしの加波山鉄道と先人達の偉業を知る事が出来ます。月曜日休館、石岡小学校敷地内、ふるさと歴史館を訪ねてみて下さい。お待ちしております。

最後になりました。今回の県指定文化財は八郷地区、柿岡市街地西端で発見された柿岡古墳よりの出土品です。

○鹿「埴輪」

有形「考古学資料」

指定 昭和四十四・三・二二

「柿岡西町古墳群」を構成する古墳で埴頂には古くから民家が営まれていたこともあって、すでに損壊がいちじるしく、埴形や規模については明確でない。鹿をはじめ、馬、人物、琴、円筒など各種の形象埴輪が豊富に出土している。特に雌鹿の埴輪は、鹿の特性をよく表現しており、胴部の鹿特有の斑点を見事にあらわしている。雄鹿は角部が欠損しているほかは、よく雄鹿の姿をあらわしている。

鹿は狩猟獣として高い経済的価値をもつと同時に神聖化され、神話や儀礼にそれが示されている。古代ギリシャ神話をはじめ、世界各国に鹿の霊力と功德に関する神話的な伝承が少なくない。

この鹿は石岡市中央公民館内（八郷地区）で見ることが出来ます。とても愛らしく上品な顔たちです。残念ながら飾りケース内が薄暗いので、浮き出ているという斑点を確認することはできませんでした。

是非ふるさと歴史館にての企画展で雄鹿とお揃いでお会いしたいものです。

参考資料 八郷町の埋蔵文化財（八郷町教育委員会発行）

登っても登っても頂上遠し日光の白根山 智恵子

日本音楽の話

木下明男

Ⅱニッポン音楽の勤労者の理解のためにⅡ

今から50年前、私が20代初め、労音と言う音楽運動に身を投じた頃のお話です。何のために音楽運動を進めるのかの勉強が始まります。そんな時に学んだテキストから。

3 古代における音楽の国際交流

音楽の大衆化をさまたげたもの

すべての文化がそうであるように、音楽も、聞き手である大衆の発展を基礎に、発展してきました。量的な大衆化のない所に、質的な向上もありませんでした。しかし、世界の音楽史のうえでは、あきらかに、この問題に対する二つの間違った考え方と方針が音楽の本質的な発展をさまたげました。

- ①大衆化と向上を別のものと考え、高い音楽は、一般大衆（勤労人民）にはわからないもので、特別の人間だけが理解できるもの、と考えた。
- ②向上を抜きにして、特別な人間の利益のために、墮落した大衆化だけをかけた。

階級というものが文化の正しい発展を妨げてきた代表的が害毒で、前は奴隷制や封建制の身分層の影響を受けた点が多く、後は資本主義社会に、特別大きく目立っていますが、日本音楽史にも、その点がはつきり現れています。

昔「サイバラ」（催馬楽）という音楽がありました。雅楽の一部で、サクハウシ（笏拍子）ワゴン（和琴）、笛、ヒチリキ、ショウ、琴、ビワ、などの楽器を伴奏に使っていますが、その大部分が外国から渡ってきた楽器です。しかし、こういう形の雅楽になったのは、平安時代になってからで、奈良時代

以前は馬子歌だったろうと言われていました。つまり、労働歌を基に、新しく入ってきた外国音楽の影響を受けて、支配者だった貴族の音楽を作り上げたわけですが、それは、もう、元の民謡とはまったく別のものになり、勤労大衆とは縁のないものになっています。

奈良時代から平安時代へかけて、日本には、サイバラ（催馬楽）のほかに、カグラ（神楽、クメウタ（久米歌）、「アズマアソビ」（東遊、風俗歌、など、たくさん民謡やハヤシや踊りがあったようです。そこへ、唐楽（とうがく）、高麗楽（こまがく）などの外国音楽が入ってきました。そして、あるものはそのまま残り、あるものは日本在来の音楽と結びつき、その両方があわさって、雅楽となりました。当時の貴族（くげ）たちは、「うたのつかさ」（雅楽寮）という官庁をつくって、これを管理し、その長官を「うたのかみ」（雅楽頭）といいました。これは今も、ほとんどそのまま宮内庁にのこっています。

これが、日本音楽の国際交流が歴史に残っている最初考えて良いでしょう。こうして日本へ渡ってきた外国音楽は、今では、本家の中国や朝鮮では亡びてしまつて、日本にだけ残っているものが多いです。それらの古い楽譜も残っていて、田辺尚雄や林謙三さんの非常な苦心で、だいたい読み解かれ、再現できるようになっています。

シルク・ロード

ところで、そうして日本へ渡ってきた音楽は、どうも、中国や朝鮮で発達したものより、ずっと西の、いわゆる「西域地方」の音楽が多かったのではないかと思われれます。

「越天楽」（えてんらく）、「太平楽」（たいへいらく）、還城楽（げんじょうらく）などという名を聞かれたでしょう。その頃の伎楽面が伝わっているのを見て、どうしてもアジア人の顔には見えません。ほりが深く、立体的で、鼻が高く、中東地方からヨーロッパやアフリカの人々顔に近いものです。また、蛇くいな種というものがでてきますが、そういうのは中国や朝鮮にはいなかったようです。

「シルク・ロード」（絹の道）ということばがあります。非常に古い時代から、天山山脈をこえて、アジアからヨーロッパへ絹を運んだ道だということです。この古い交通路は、遠く、ギリシャやエジプトから、日本にまで通じていた証拠があります。

法隆寺には有名な「玉虫厨子」（たまむしのずし）というのがあります。それには、ハートがたの唐草模様がついていますが、明治時代の建築学者の伊東忠太さんの研究で、それが、古代ギリシャの壺の模様、ペルシャのペルガモンの宮殿の飾りなどと同系列のもので、日本文化が遠くギリシャやエジプトと繋がっている事が明らかになりました。

これは、忍冬かずらの葉で、葉や酒を作るのに使ったらしい。中国成都の王建古墳の発掘等でたくさん出土しています。ベトナムの古美術の写真にも、また、ウズベクやタシケントでは、今も、クッション模様に使われています。非常に古くから東西文化の交流が行われていた証拠で、もとより、音楽も例外ではありません。折角はるばると日本へ渡ってきた外国音楽も、階級の垣に妨げられて、十分に日本本来の音楽を育て上げることができませんでした。

「越天楽」と「ふき組」

雅楽の楽器には、演奏の難しいものと易しいものと、両方あります。当時の貴族たちは、易しい楽器だけは、自分たちで演奏し、難しい楽器は、婦人その他の奴隷に演奏させました。こうして、ごく僅かの貴族が雅楽を独占しました。当然、雅楽の音楽としての発展はとまりました。

しかし、そういう不自然な制度や習慣を内から突き破るときがきました。室町時代中期に、応仁の乱がおこつて、貴族たちは、都を追われ、ある者は大内氏（今の山口県の大内）の所へ逃げました。奴隷を連れて行くわけにはいきませんから、そこでは雅楽はもとよりの形で演奏できなくなりました。

「越天楽」（えてんらく）という曲があります。蛇くいな種が蛇を捕まえて喜ぶという曲です。仕方がないので、貴族たちは、その「越天楽」の音楽に、日本の和歌を当て嵌め、七つの歌を作り、自分たちの弾ける、易しい琴の伴奏で歌いました。

江戸時代に入って、琴の八橋検校（ヤツハシケンギヨウ）（1614-1685）が、この「越天楽」の七つの歌をもとに、「ふき組」という組曲を作りました。「ふき」という草の名、みょうがという草の名」といううたで始まっているので、この名がついています。モツアルトが有名な組曲を作ったのと、ほぼ同じ時期です。

この「ふき組」から、琴や三味線による音楽が大発展することになりました。それまで、雅楽の琴は、ただ、「トン、カラ、シャン」を繰り返すだけの、究めて単純なものでしたが、「ふき組」が生まれて、にわかには、楽器の演奏が大発展し、内容も大発展しました。それから、地唄、長唄、各種の浄瑠璃の発展する基礎が置かれました。その原因は、ごく僅かの貴族に独占されていた音

樂が新興の多くの町人に解放されたことです。大衆化の基礎なしには、音楽の正しい発展のありえない、何よりの証拠です。

三つ又沖を目の前に田伏を歩こう 伊東弓子

いよいよ出島(かすみがうら市)の突端、田伏だ。田伏はとても広いように思え、取り掛かるのに不安を感じた。歩く所を沢山入れよう、寄る場所は十ヶ所、距離と時間をどう取るか、戸数も大部あるし考え倦ねるばかりで前に進まない日が続いた。集合場所は天守閣の聳える資料館、終着駅はお食事処「魚野川」。出島での歩く会最後の場所として、地元の馳走を戴けそうな所。名も私達「御留川」「ミナ川」等の響きと似ていて不安から喜びとなり少し先が見えてきた感じだった。

今回も協力が、足となって何回も下見に力を入れることが出来た。有難い限りだ。そして地元の方の応援も大きかった。魚野川の奥さんは、チラシのこと、地元への働きかけをしてくださること。また、お店で食事をしていらした「かこさん」という方は「一人で歩いては大変だ。回覧板で回してあげるとのこと、大きな力となってくれた。」

当日は、穏やかな日だった。集合場所の不明だった事の指摘があったが、捜してきてくれたとのこと。資料館では時間が取れないので、家族でお出かけ戴くよう、又個人で立寄って下さいと話す。

後側にある歩崎公園ビクターセンターは、池上先生が三シリーズで「御留川」の講演をした所だ

った。

ここは出島村の頃の、村立保育所の跡を利用した市民の学び場となっている。

バラ園は、かこさんが紹介してくださったので、寄ることにした。入り口には、加工した霞ヶ浦の魚を売っていた。花は盛りも過ぎたが、緑の中で休憩するのもよい所だ。来年は、花の頃来ようと言っている声も聞こえてきた。

陽射しの暑さを感じながら歩崎観音堂の境内に入った。茂った木立の境内は荒れ果てることなく掃き清められている。住職の車か、留守役の人の物か置かれている。石仏や映画「米」の記念碑、「折本良平」の碑も静かさの中に建っている。

撮影の賑わいが、帆をあげていく漁船の影も遠い昔となった。ここ立って夢の浮島、大山の秋月、香取の森、牛堀の帰帆、天王崎の夕照、高須崎の孤松、三つ又沖の眺望、沈鐘の伝説に思いを馳せる景観など県名勝に指定された所だ。

孫の名と重なって、一度ゆっくり来たい所だった。この近くに青年研修所があったはずだ。若い日に新治、郡の青年男女が集まって、(地域の農業問題、世界のこと、平和の問題、将来のこと)等、熱っぽく語り合い夜の更けるのも忘れて時を過ぎた。明け方眠気を飛ばして「野良仕事をしなきゃ」と帰って行く友、「親父に借りた車を仕事前に返さなきゃ」と戻って行った一人一人の後姿を思い出す。みんな老いて、今、幸せだろうか。

坂を下って竹林に囲まれた一隅にある、民家園を見に行った。あちこちで民家を見る。それぞれ共通点もあるが、一軒一軒が特色をもっている。私の小さいころの住居だ。三世代四世代が肩を寄せ合い、農作業や山仕事で、漁で家族を養い、家

畜も一緒に暮らした。笑い合い、涙し、怒り声が壁にぶつかって外へ漏れていった。出産の喜びも、亡き家族の見送りも皆でやって来た場所だ。裏の方からお婆ちゃんが出て来そうな気もして振り返って見ても風が過ぎただけ。

あゆみ庵に入った。床の間の一輪の花と掛軸の一語に心癒されて、形も自由さの中で一服戴いた。訪れる人の為にいつまでも続いてほしい場所だ。

歩崎公園に入り、堤防に行く。もうすっかり広い空間が広がって遮る物は何もない。一部車道と歩道が分かれている所があった。右奥に浮島がはつきり見える。古渡より右にあるだろう。古地図を頭に浮かべもつとつと広がっていた流れ海。人間の手に、力に止められることもなく自由に生きて数多くの物を育てていた偉大さ、美しさを知ってやりたい。

国分寺の鐘は、今の泥深い水の中で睨いていないだろうか。話してみたが知っている人はいなかった。

水産物の加工を若手が大規模に経営している小沼会社があった。世界の市場にも出しているという話だった。漁も盛んな所だった。堤防が出来た後不漁になっていく。捕る漁から育てる漁など体よく変わった中で養殖の生簀が造られた。続けている人は水をふんだんに出して活気がある。止めた生簀の後は水を抜いて草が生えて荒地となっていたり、野菜を作っている。中学校時代の友もこの地に嫁いで来て頑張ってるよ、とのことだった。渡船場もこの辺りだったという。水上交通の発達も、陸上交通の発達も早々取り入れた地区である。

田伏村に御留川の漁場が二ヶ所ある。㊸ミナ川

と④オオサキ川である。丁度大橋の両脇という場所だ。大崎という地名も残っている。かこさんのもと屋敷は、そこにあつて漁もしていたとのこと。今の所へ移り住んでからも屋号はオオサキというようだ。大変な場所だったろうが沢山捕れた所だろう。

田伏鹿島神社には、和算の上達を願つて絵馬が上られていた。上玉里村の人の名があつた。夏祭りには「おいでよ」と声をかけてくれたお年寄りがいた。来てみたいという気はあるが無理だろうな。かこさんの縁者が開いた郵便局も設置されたのが早く、地域の大切な場所だと聞く。

鹿鉄バスの車庫、事務所の跡は更地になつていた。村史のページに当時のバス、運転士さんの姿が載っている。何度も乗つたことがあり、懐かしい。

ナギの木のある大屋敷も尋ねた。日本列島も九州近くに生えている木だそう。どうしてここに芽を出し育つたのか、考えるとドラマも生まれるかもしれない。この屋敷続きに醤油の樽（大きいもの）が二つあつた。醤油づくりをしていた頃の物だという。震災で壊れて屋根がない方は、ほとんど崩れてしまふだろうが、どう仕様もないと。

田伏城もこの地にしつかり根をおろした田伏氏の時代が忍ばれた。山城のあつた所へ、墓添いに登つて行く。草を分けて行くところ遠くない所に城跡が目に入る。平らな場所だった。遠く広くよく眺められる。帰りに挨拶もなく入つてきたこととお詫びしに行くと、若い住職は穏やかな表情で話してくれた。城跡から隠道があるという話だった。前もつてお願いしておけばもっと世界が広がったかもしれない。

予定のコースを終えて魚野川に到着。五ツに分かれてテールを囲んだ。歩いている時は話しが出来ない人とも顔合わせることで話がもてよかつた。何度かお会いすることで、奥さんとも話しが深まつていった。遠い新潟からこの地に来て一人でお店をしている。ご主人は影の力で支えてくれるのだということで「作つた野菜をどうぞ」と言つてくれた。そういえば入つてくる時、駕籠に野菜が入つていたことを思い出す。優しさが伝わってくる。

水難の碑をニヶ所見ることが出来なかつたことは残念だった。次回の時か石佛のグループに協力して貰おう。

御留川を捜すために歩いたのだが、出島の半分まではいかなくても、三分の一位は訪ねられた。奈良時代の畿内に向かう古道から、江戸時代の水戸への道、そして現代の道と、多くの人が歩いた道を私達も歩いた。私たちが歩いた道は、一人の趣味や道楽から歩いた道ではなく、みんなが未来に向かって歩いた道だと自負している。青年時代の人達との出会いを確かめ、現在、志しを同じくする人達と歩いた想いを、チラシを受けとつてくれた人達につながつてほしいと願つて田伏を後にした。

虎塚古墳

小林幸枝

ひたちなか市にある虎塚古墳が、春と秋の数日間、一般に開放されるのを知り、出かけてきました。

虎塚古墳は、古墳時代終末期最大級の前方後円

墳で、全長^{56,5}メートル、後円部直径^{32,5}メートル、前方部幅^{38,5}メートルの規模をもちます。

昭和48年8月から9月にかけて、勝田市史跡編さん事業として調査が行われ、その時に後円部南向に軟質凝石灰で造られた横穴式石室が発見されました。

石室内部からは、一体の遺骸と共に黒漆塗太刀・刀子などの副葬品と死者の霊を悪霊から護るために描かれたであろう彩色の壁画が発見されました。

壁画は、玄室の壁面に白色粘土で下塗りを施した上にベンガラ顔料を絵具として赤く描かれていた。三角文・環状文・円文・渦巻文などの幾何学文と武器・武具・馬具・装身具などの絵が描かれていた

初めてみた壁画は美しく、神秘的でした。

虎塚古墳の近くに十五朗穴（十五朗穴横穴墓群）というのがある事を知り、帰りに寄つてみたのですが、修理中のようにブルーのシートが架かつていて見学することが出来なかつた。

各地に鎌倉時代の曾我兄弟の仇討ちにまつわる話が残っていますが、ひたちなか市にも、曾我の十郎、五郎兄弟がこの地まで逃れて来たと言われています。その時に隠れ住んだ穴を「十五朗穴」と呼ばれるようになったのだと伝えられています。今回は、見ることは出来ませんでした。また機会を見つけて、行ってみたいと思つています。

ちよつと気を付けて、興味をもって自分たちの地を見回してみると、色々な歴史跡があるもので、価値があるのかなとか言わないで、大切にしたいなと、改めて思いました。

【風の談話室】

《特別寄稿》

落ち穂拾い(2)

鈴木 健

(1) 石和

コクフ(國府)の文字の意味もわからず書き方も難しかった(近年までは國は國と書いた)ので、國という漢字は敬遠され石と書かれ、イシと読まれたことが多かったと推理した。石はイサともよばれた。砂は石の子ということでイサゴといわれ、日立市砂沢、古河市砂井、栃木県那珂川町小砂、いずれも砂はイサゴと読む。同じく、山梨県笛吹市に大字で石和。この語源は何か。「尊むところ文字あり」として石和という「文字」を尊重して意味を考えても、皆目見当がつかないので、学者諸先生はなにもおっしゃらないが、語源のない地名なのであろうか。同市には一宮町に国分、春日居町に国府、御坂町に国衛の大字もあることからすれば、そこには国府があつたことはまぎれもない。石の文字ではなく「言葉」を採ればコクもあつたので国とみる。和は呉音ではワであるが、漢音ではカ(クワ)だ。しかも、石和は『和名抄』では「石禾」となっており、その禾は「ワ」とは読まず、呉音漢音ともカ(クワ)である。和はカに遡るので、石和はコクガ即ち国衛(コクガ)であつたろう。奈良時代、火災などの被害を受けると、国衛(国庁)は転地したので、石和が国衛、御坂町にも国衛、春日居町に国府があつても不思議ではない。

(2) 石岡の地名

寄り道に時間を取ってしまった。石岡にもどり、

先人達が見過ごした旧石岡市内の国府と関連がある地名をいくつかとりあげてみよう。

☆ 香丸：丸は本丸、三の丸というように郭(テ)ルウ(一定の区域の周囲に築いた囲い)名に使われた。国府はコウとも読まれ呼ばれたので、コウマルは広く国府城を指す場合も、そのなかの国庁城だけを指す場合もあり、香の字があてられることもあつた。したがって、国府城内の小字名の香丸はそこが国庁城であつたことを示している。通常国府城の範囲は八町四方とされ、「君子南面」で、その北辺の中央に国庁が南面していたと推定されている。そこから中町を経て南北幹線道路が延び、等間隔に古井戸が現存する。その東に大小路、他の国府所在地には大光寺。大國府寺(ダイコウジ)のことか。南方の中津川に香勢堂。これは戦国時代、三村城落城のおり集団自決した府中城の軍勢の供養堂が建てられ、後に地名になったものといわれている。国府城外の北には国分寺、国分尼寺跡、京(庁?)の馬場、星の宮、鹿の子、要害、方八町などがある。主なものを取り上げる。

☆ 方八丁：各地の国府城は一辺8町の方形(1町約100町)が基準になっていたらしく、その後、国の出先に「方八町」という別名が使われだした。今、東北地方を除き残っているところは見当たらないが、石岡には、それが国府城から北西4kmほどの市立北小学校付近の平坦台地に小字名として残っている。しかし、それに気がつかないのか、国府から離れているので理解に苦しむからか、いままで取り上げた人は皆無である。そこで、岩手県にある「方八丁」からそれを考察してみたい。

「古代中央政府が律令制により未開の東北に計画的村づくりのため、蝦夷に備え一定区域に柵戸(キ)ノ(、城堡(シヨウホ、土塁、堀)などで囲った城形を作り、兵士兼農の屯田兵を配し、地方政治・軍事・交通の役割を持たせた集落が方八丁で、この古代官衛施設跡に「特徴的に「方八丁」の地名が見られる。高橋富雄は、「この地名を残すところについては、何らかの形でその地域における中心的行政施設の存在が推定される場合がすくなくない。」とする。」(小島俊一『奥羽山脈・北上川流域の地名』)

「岩手金地方でも、北上川流域にみられるのが「方八丁」という地名です。これは古代に「方八丁」という呼び方があり城柵(郡城)の別名になっていたことから生まれた地名のようです。例えば盛岡市下太田の「方八丁」は「志波城」のあとでしたし、水沢市佐倉河の「方八丁」は「胆沢城」の跡でした。「このほかにも九つの「方八丁」が残ります。」(大正十三年造『岩手県の古地名物語』)

さらその具体的な状況を示すものとしては大宝令(701年)の軍防例縁辺諸郡人居条に「凡そ東辺、北辺、西辺に縁る諸郡の人居は、皆城堡内に安置せよ。その柴田の所は、ただ庄舎(開墾小屋)を置け。農時に至り、柴作に堪えん者は、出でて庄田に就け(開墾地で就農せよ。収斂(シユウレン)＝收穫)おわらば、勒(ロク)して還せ(連れて帰れ)。その城堡崩れ落ちなば当処の居戸を役し(そこに住む者を使役し)閑に随いて修理せよ」とあり、その「東辺、北辺とは、謂う、陸奥、出羽等の国なり」(『令集解古記』大宰令注釈書)とされている。

石岡の国府城外にある「方八丁」をこのような角度から見直した場合、それは蝦夷地侵攻、農地開拓の基地、国府守備軍の駐屯基地と考えたい。

兵士たちはその「方八丁」内で生活し、その内外で軍事訓練を行い、農耕に従事していたことであろう。そして、彼らが使用する武器や農具を製造・管理・供給したところが、近くの子C遺跡¹だったのではなからうか。鍛冶工房跡が発見され、鎌・鋤・刀・鏃の農武具が発掘され、兵士自備戎具簡閲簿（軍防令にもとづいて兵士が準備すべき兵器の点検のための帳簿）が出土し、「奈良時代末から平安時代前半に営まれた遺跡であり、八世紀後半から始まった蝦夷征討の基地として重要な位置を占める国衛工房的機能を有した遺跡であると考えられている」²『市制三十周年記念石岡の歴史』そこは「方八丁」に隣接している。

☆ 鹿の子・要害：国府の周りには製鉄遺跡が数多い。かすみがうら市栗田のかなくそ（金糞³鉄⁴⁵ 山、同市の中志筑の小字鹿鳴草（カナクサ・かなくそ。石岡市井関の金子沢、かすみがうら市下志筑の小字兼子などと同様この鹿の子もカネコ（鉄子⁶砂鉄）であったらう。

方八丁に隣接して小字「要害」がある。この要害は『続日本紀』797年の大宝二年（702年）の頃に現われ、中世に多用された。それは、味方にとつては重要で敵には障害となるの意味で、地勢が険しく守りやすい攻めにくいところ。転じて、そのような地点に築いた城塞・とりで・要塞（後の城館も）を指す用語であったものが、のちにはその跡地の地名となり、今でも小字名となって県内各地に石岡市石岡、同半田、高萩市下手綱、日立市助川町、同河原町、竜ヶ崎市半田、つくば市高崎、稲敷市寺内、常陸太田市国安、大子町町付、行方市羽生、下妻市見田等の小字要害が残る。

母音のoは口の開き加減でuに聞こえるので、ところによってはヨウガイは妖怪ではなくユウガイになり、それに次のような漢字を宛てた小字名が現存する。常陸太田市大門町の幽界、常陸大宮市長倉の遊替、常総市若宮戸の夕貝。しかし、より自然の呼び名はリユーガイ・リーガイでこれのも様々な当て字が使われている。稲敷市阿波、美浦村舟子、鹿嶋市須賀、大子町上野宮、利根町横須賀などに竜貝、鉾田市徳宿、大子町佐貫、つくば市沼田などに竜替、そのほか、常陸太田市に竜界・竜海・竜害・竜蓋・竜外、鹿嶋市竜会、筑西市竜涯、竜ヶ崎市竜ヶ井（竜ヶ崎も竜ヶ井崎の転であろう）、鉾田市竜ヶ居下、常陸大宮市竜ガイ、牛久市竜かへ・竜ヶへ下、かすみがうら市流替、神栖市流外、ひたちなか市リュウガイなど。このように各地の要害跡地には思考を凝らした関連小字名がみられる。地名の語源をその漢字の意味で解釈することに固執する研究者は、パニックにならないよう要注意。ではなぜユーガイがリュウガイに変身するのか。

市の見解では、竜ヶ崎という地名の由来は東側に続く丘陵の形が竜に似ているかたとし、住民も同意見ということ、納得している。しかし、市街地に、竜ヶ峰といわれ、かつては岬状だったと思われる独立丘の上に、小字古城がある（竜ヶ崎二高。全盛当時そこは要害だった。その要害崎（ヨウガイザキ）が上記のようにヨウガイザキ・ユウガイザキ・リュウガイザキとなったのではなからうか。茨城では、「お夕飯（イハン）食って牛乳（ギニー）飲んだら湯（イ）さへーれ」などと、yuをiと発音したりする。「リーガサキチーガクの前をキーキーシャが通った」と言う人も

ある。同じ転音は東京でも十階建てをジツカイダテ。この東京言葉は共通語として学校教育で強制された。茨城では反対にi→yuもある。「成田からシユチュジュカン（七時間）もかかった。キュナイ（糞内）でチーシヨク（昼食）を食べたらキュブン（気分）悪くなった」。昔は湯は貴重だったはずだから、金銭濫費の例えに言う「湯水のごとく」は理解しがたい。それは「井水」の訛りではなかったか。

また、その夕飯をリーハン、湯をリ、あるいは、昨夜（リーベ）、硫黄（リオウ）、雪（リキ）、意気地（リクジ）、家（リー）、よい（リ）、益（レキ）、煙硝（レンシヨウ）など、i(e)をri(re)に発音する地域がある。かつては、県内全域にひろがっていたと思われ、奇しくも朝鮮半島と正反対の転音現象である。

書き終えてほっとした時、三笠宮逝去の報が入りました。新聞切り抜きがあったことを思い出し、探したところ、2000年6月16日の朝日新聞につぎの記事が載っていました。

「日本軍の残虐行為を間近に」三笠宮殿下

三笠宮崇仁殿下（八四）は十五日、東京都文京区のホテルで開かれた日本画家、平山郁夫さん（七〇）の古稀の祝いに出席し、あいさつで「戦時中、中国での日本軍の残虐行為を間近にして、身の縮む思いをしました。そのことを昭和天皇に報告したという経験もあります。」と話した。平山さんが、日中の文化交流に貢献していることに関連して語った。

三笠宮殿下は一九四三年から一年間、南京の総司令部に赴任した経験があり、八四年に出版した

自叙伝「古代オリエント史と私」の中では、自分が見聞きした日本軍の残虐行為について「生きた捕虜を銃剣で突きささせる」「毒ガスの生体実験をしている映画も見せられました」などと書いている。

また、紀元節復活に一貫して反対し、昭和天皇の弟の立場で言いにくいことをはっきり表明され、国民の歩むべき道を示された。学者としての良心に心から敬意を表します。
(10月27日)

《読者投稿》

私の国府巡り「国際都市 平城京」

京都府精華町 今井 直

去る十月五日、読売新聞(大阪版朝刊)の一面に大きな文字が躍った。「平城宮、ペルシヤ人登用!」平城京の人事を統括する役所・式部省跡から出土した八世紀中頃の木簡に、「破斯清道(はしきよみち)」という名のペルシヤ人の文字が書かれていたと、奈文研「奈良文化財研究所」が発表した。「破斯」は中国語でペルシヤ「現在のイランを中心とする地域」を表し、国際的な知識を認められたペルシヤ人が、特別枠で平城宮の役人として登用されたらしい。役人を養成する「大学寮」での勤務状況を報告した記録だという。

『日本書紀』に続く正史である『続日本紀』には、天平八年(736)八月に、遣唐副使が帰国の挨拶のため、唐人三人・ペルシヤ人一人を率いて聖武天皇に拝謁し、同年十一月には唐人らとともに、波斯(『破斯』人の李密翳(りみつえい)に位階を授けたと記されている。今回の木簡の判読により、

記述の裏付けがされた。ただ、破斯清道が帰化して李密翳と改名したのか、あるいは清道の家族か関係者なのか、それ以降の記録がなく不明である。最近、国会議員の二重国籍が問題視されたが、平城京では外国人も分け隔てなく役人に登用され、国際性豊かな都だったことが分かる史料と言える。当時、平城京にやって来た外国人では、インド僧・菩提僊那(ぼだいせんな)や唐の鑑真和尚がよく知られている。東大寺の大仏開眼供養(752)の導師を務めた菩提僊那は、はるばると日本へ海を渡る際、波斯人李密翳(『遺唐』)と同じ遣唐使船に乗り合わせていたようだ。鑑真和尚は、何度も渡航に失敗し六度目にやっと来日を果たすが、既に六十七歳に達しており渡海の苦勞で両目とも失明していた。それでも精力的に、東大寺に戒壇院を設立し授戒の制度を整備、さらに戒律の道場として唐招提寺を建立した。

破斯清道が来日した目的は何だったのか? 某テレビ局の番組のように『Youは何しに日本へ?』と、聞いてみたい。遣唐使は朝貢(ちょうこう)「皇帝に貢物をして地位を認めてもらう」外交であったから、遣唐使節団が波斯人を拉致してきたとは考え難い。当時、海を渡るのには命がけの覚悟が要り、強い意志が働いたはずである。もしかするとイスラム教の布教が目的だったのだろうか? わが国に仏教が伝来したのが538年(52年の説もある)、キリスト教は約千年遅れて一五四九年にザビエルが伝えた。外国の宗教や儒教の道徳思想などが、日本人の生活・文化に及ぼした影響は非常に大きい。仮に仏教伝来から二百年後の天平時代に、破斯清道によってムハンマドの教えが大和に根付いていたら、歴史の流れにif「もし」ならは

禁物だ。

菩提僊那も鑑真和尚も故郷に帰ることなく、それぞれ奈良の靈山寺と唐招提寺に墓地がある。このペルシヤ人も遠く異国の地で生涯を終えたのだろうか。誰しも「ふるさと」は、自分のルーツであり特別な地だ。いつも心の中には、懐かしい「ふるさと」があったはずである。

平城遷都後初めての遣唐使節団は、難波津から総勢五百五十七名が、四隻の遣唐使船に分乗し海を渡った。養老元年(717)だから、来年はそれから千三百年目にあたる。難破や漂流する事態に備え、大使や副使など高官は別々の船に乗ったようだ。この時の遣唐副使・藤原馬養(うまかい)は、唐に滞在中に「宇合」と改名している。一行の中に、十九歳の若き留学生・阿倍仲麻呂や同世代の吉備真備(きびのみまきび)や玄昉(げんぼう)もいた。運命のいたずらか二十数年後、右大臣・橘諸兄(たちばなのもろえ)のブレーンとなった真備や玄昉が、宇合の嫡男である藤原広嗣(ひろつぐ)と激しく対立し、広嗣は太宰府で乱を起こして討たれることになる。皮肉な巡り合わせだ。

翌年、使節は全員無事に帰還したが、勉強のため残留した真備や玄昉は、次回の遣唐使船がやって来るまで在唐は十八年に及んだ。天平六年(734)、遣唐大使と共に彼らが乗り込んだ帰り船は、種子島に漂着した。唐人・ペルシヤ人らに乗せた副使の第二船は唐に流し戻され、唐の援助で船を修復し翌年帰国。第三船は崑崙国(南ベトナムまで流されたが、四年後に日本海を経て帰還した。第四船は難破して帰って来なかった。ふるさとが遠い彼方だったのは、阿倍仲麻呂も同じで、最難関の官僚登用試験である科挙に合格し、唐の玄宗皇

帝に仕えていて帰国できなかった。

吉備真備は帰国後、天平十三年(741)に皇太子の教育係として、阿倍内親王(後の孝謙天皇)に『漢書』や『礼記』を講義した。天平勝宝四年(752)には、遣唐副使として再び入唐し、阿倍仲麻呂と再会する。すでに在唐三十五年を経過していた仲麻呂は、真備らと共に帰国することにした。しかし、大使や仲麻呂の乗船した第一船は暴風雨に遭って南方へ流され、命は助かったものの帰国が叶わなかった。副使・吉備真備の第二船も遭難したが、どうにか屋久島に漂着した。この時、六度目の来日チャレンジとなった鑑真を伴っている。真備の生誕地は、現在の岡山県倉敷市真備町と伝えられ、中国風の「まきび公園」や「まきび記念館」があり、最寄りの駅は、井原鉄道井原線の「吉備真備駅」だ。駅名は「まきび」だが、町名だけは「まび」という。

結局、阿倍仲麻呂はふるさとの美しい風景を二度と見ることなく、宝亀元年(770)一月に、異国の地で七十三歳の生涯を閉じた。仲麻呂の望郷の歌だけが、独りさびしく故郷に帰って来た。

天の原 ふりさけ見れば 春日なる

みかさの山に 出でし月かも

(百人一首／古今四〇六)

二〇一〇年開催の「平城遷都一三〇〇年祭」に合わせ、「平城京歴史館」の前に遣唐使船の復元模型が原寸大で展示された。「現在はともに撤去され、来年度、新たに「平城宮跡展示館」がオープンする予定」原寸大とはいえ資料が全くなく、十三世紀ごろに描かれた「吉備大臣入唐絵詞(にっとうえことば)」や「鑑真和上東征絵伝」の遣唐使船をモデルに考察されたという。全長約三十メートル、全幅約十

メートル、網代(あじろ)帆を張る十数メートルの帆柱二本を備えた平底の船だ。このような箱舟に、百人余りと水・食糧や荷物などを積み、風が頼りだから台風の間隙を選んで航行した。海図も磁石すらない時代で、難破しないほうが不思議だった。

平城京は「シルクロードの東の終着点」と呼ばれるが、正倉院宝物を見れば一目瞭然だ。遣唐使節団が命の危険を顧みず、文化交流に果たした役割は計り知れない。千三百年後の今日まで、国際色豊かな文化を示す当時の品々が、保存され受け継がれてきたのも奇跡に近いといえよう。今年の「正倉院展 2016」の目玉となる展示品は、「漆胡瓶(しっこへい)」という優美な水差しである。高さ約四十一センチ。ふつくらとした胴体に鳥の頭に似た注ぎ口がついたデザインは、ペルシャで流行していたという。表面に黒漆を塗り、鹿や蝶や草花の文様を銀板であしらっている。

すると十月十三日に今度は、「木簡にペルシヤ人の顔？」の記事(読売新聞)が出た。木簡に描かれた似顔絵で、横を向いた男はスキンヘッドに天狗鼻である。文字を練習したような跡もあり、下級役人が退屈しのぎに落書きしたのだろう。絵は東洋人に見られない彫の深い顔だ。正倉院宝物の伎楽(ぎがく)面に似ている。伎楽は、飛鳥時代に大陸から伝わった仮面をつけ滑稽に舞うパントマイムで、大仏開眼供養でも盛大に奉納されたという。伎楽に登場する酔胡徒(すいこじゅう)はペルシヤ人だから、平城京には記録に残る破斯清道だけでなく、奈良公園などで現在見かけるように、外国人が溢れかえっていたのかもしれない。

似顔絵の木簡は、「破斯」と書かれた木簡が発見された場所から約七十メートル北東で見つかり、同年代

のものらしい。今秋、平城宮跡資料館では、「地下の正倉院展」でこれらの木簡を百八十点ほど展示している。奈文研の秋の特別展は今年十回目を迎え、たいへんな賑わいだ。考古学マニアの爺々だけかと思ったら、遠足で来た小学生は熱心に見学し、若い木簡ガールや古代史歴史女もいて驚いた。

実は、「破斯」と記された木簡は、昭和四十一年(1966)に出土していたと云う。半世紀も前のことだ。文字の一部が薄くて読めないために、奈文研の倉庫にずっと眠っていたのだ。今年八月に赤外線撮影した結果、「破斯」「天平神護元年」(765)などの文字が判読された。地下に千二百年も埋もれていたことと比べれば、五十年は大した時間でもないかもしれない。その間、奈文研の史料研究員がサボっていたわけではなく、奈良県は至る所タイムカプセルの宝庫だから、常に仕事如山積みだそう。

不要になった木簡は削って何度も再利用された。手軽なメモ用カードでもあった。式部省跡のゴミ穴から出土した約千三百点の木簡のうち九十五%がその削り屑で、表裏の面を残す木簡はごく僅かだという。それも割れたり欠けたりするものばかりだ。かつお節状に削られた木屑に残る僅かな文字が、貴重な過去からのメッセージである。出土した薄い削り屑は土ごと箱に入れ、乾燥を防ぐため水がはつてある。それを担当者(丁寧)に筆で洗い、木片や葉・種・廃棄ゴミなどに分類する。ミリ単位の物も見逃さず、一点一点つ記録を取り、保管する作業である。

ソウル五輪を間近に控えた昭和六十三年(1988)夏、平城宮跡で古代史上たいへんな発見があった。聖武天皇の御世に政界の重鎮であった長屋

王の邸宅跡が見つかったのだ。長屋王の父は天武天皇の皇子・高市皇子、母は天智天皇の皇女・御名部皇女（みなべのひめみこ）「元明天皇の同母姉」であり、草壁皇子と元明天皇の娘・吉備内親王を妃とするエリート中のエリートである。長屋王は都の人事を掌握する式部省の長官「卿」を務めていた。台頭してきた藤原四兄弟「武智麻呂・房前・宇合・麻呂」との確執から、謀反のかどで糾問を受け、一族もろとも首をくくって自尽させられた。この事件は、藤原氏による陰謀だったと言われる。その後、宇合が式部卿・麻呂が兵部卿に就任したことからも推測できる。

邸宅跡と特定された決め手は、「長屋親王宮鮑大贄（おおにえ 十編）」と記された木簡だ。長屋王邸に、貢物としてアワビを十束運び込んだという荷札である。さらに四万点に及ぶ大量の木簡がザクザクと出土した。発見場所は平城宮朱雀門前の大宮通りを東へ約一棧、「奈良そごう」の建設予定地だった。

そごう側は、一億五千万円もの発掘費用協力を負担したという。創業者が奈良出身のため、面目にかけても事業を成功させたかったのだろう。宮殿に接する平城京内の一等地だから、史跡に指定されて当然だろうが、そごう側は建設計画を大幅に変更して押し切った。百貨店にもかかわらず地下売場を作らず、多くの建物跡は駐車場として地下保存された。平成元年（1989）に開業した奈良そごうは、一階の店舗中央部には天井にまで達するほどの、法隆寺夢殿を模した黄金の「浮夢殿」をしつらえ、六連のエスカレーターを設けるなど、バブル絶頂期だけに超豪華なデパートであった。

ところがバブルがはじけて、十二年後奈良そごうは閉店においこまれた。三年のブランクの後、この建物にイトーヨーカドー奈良店が入り、余りにも絢爛豪華なスーパーマーケットが誕生した。店舗内に残された長屋王邸跡を示す発掘現場のコーナーも、浮夢殿も撤去され、今や店員に長屋王邸を尋ねても誰も知らない。すべては、夢のまた夢だ。

遷都祭以降も毎年春・夏・秋に開かれている天平祭では、貸衣装を着て宮跡内を散策できる「天平衣装体験」が盛況だ。そぞろ歩きの天平人たちは、男性や子供より圧倒的に女性である。外国人も嬉々として変身を楽しんでいる。イスラム圏の女性は、スカーフのような布で頭髮を隠しているが、意外とこれが天平衣装とマッチして違和感がない。ルーツが共通するのかもしれない。破斯や唐土・天竺・崑崙の国から、はるばる平城の都へようこそだ。そしていつの日かまた、平城の都へ「おかえり！」

（参考文献）東野治之著『遣唐使』（岩波新書）平城宮跡資料館編『地下の正倉院展』資料集

終活（2）

木下いくこ

今日から母の遺物整理に取り掛ける。母は小さい時から本が好きで、たくさん小説、書物を読んでいた。また、書く事も好きで暇さえあれば詩や短歌、小説、エッセイ等を書いてきた。俳句や短歌仲間もたくさんいた。新聞への投稿も数多く出し、掲載も多かった。読売新聞や毎日新聞、全国紙から大賞をいただいたことも度々。その都度県

知事賞も。

還暦を過ぎたころから、茨城県の教育委員会や生涯学習の方達から声がかかり、中学校や高校（先生や父兄も対象）各JAの組織等の講演活動も（読書の楽しみなど）度々だった。

古い段ボールを開けると原稿用紙が沢山。中には小説もある。これら全てを読むには、山小屋かホテルにでも籠らないと、できないだろう。私としては読みたいもあり、読みたくもない。いかにするか。明日考えよう。

昨日は13号台風の余波で荒れ模様、そんな空と同じ、気分もすつきりせず、整理も気分が乗らない。数日前に整理した物の中に、24年前に母が、毎日新聞に投稿した記事が見つかりました。

1993年5月 毎日郷土提言賞 茨城県 準優秀賞 杉山はつ 八郷町柴間

|| わが里にギター館完成 ||

|| 弦の音色に感動の涙が ||

世界的ギターリストの弾く音色は透き通るように響き、その感動は拍手となって会場にこぼれました。わが里にギター館が建ったのだ。涙がとめどなく流れた。夫が「喜びも苦労もこれからだぞ」と言った。西洋の宮殿を思わせるドーム型の建物の中に、私の作った菊がおっている。

1990年、私たちの土地にギター館を建てたという話が持ち込まれた。労音やギター文化協会の役員である娘婿が大勢の人が、スペインの景色に似ていて、交通の便が良いからと熱心に話をした。故マヌエル・カーノ氏の貴重なギターコレクションの展示も予定された。そのようなギター

の殿堂は世界にないという。

しかし夫は「地元の人が理解してくれるかどうか」心配し、すぐには返事しなかった。しばらくして、話が決まり、役員たちが大阪や東京から何度もやってきた。私の家に立ち寄り、親元に帰ったように心が休まると言ってくれた。私は知らない世界を学ぶ事が出来た。

ギターコレクターやギター作りに命を燃やす人設計、施工、デザイン。それぞれの立場でギター館への愛と情熱は燃えていた。私の夢は世界を駆けめぐった。特にフラメンコギタリストのマヌエル氏についての話を聞くと、その音色と詩情が漂ってくるのだった。この地が文化向上の一大基地になる。生の音楽の良さを多くの人に分かってもらいたい。

しかし工事が始まると、嫌がらせの電話が相次いだ「工事をすぐやめろ」「下水で田が汚れる」。私の心は揺れた、でもきつと喜んで下さる日がきつとくる。ギター愛好家からは、演奏会が楽しみだと電話がかかってきた。私の行くところどこでもギター館の話が出た。

私の故郷高崎市には、群馬交響楽団があるうえ、娘が東京にいますので、演奏会に行く機会は多い。そのたびに「都会の人は得だ、近くで生の音楽を聞ける」とつぶやいてしまう。

我が家の家の畑は丘の上にある。日に7回色を変え、筑波、足尾、加波の山々。くわを手に、かなうはずのない夢を見ていると、決まって音楽が聞こえてきた。それは、ギターだったりヴァイオリンだったり。わが里にギター館が建ちました。見に来てください。そして我が家で熱いお茶でもどうぞ。

養生日記

堀江実穂

某月某日

友部の公民館で、ふる里祭りが行われた。

以前、私の働いていた保育園も鼓笛で出場していた。素晴らしい演奏で、感動した。園長先生とも20年ぶりにお会いでき、話をする事が出来た。園長先生は、当時と変わらない若々しい姿で、園児達と接しておられた。

午後からは、私の好きなグループのライブがあり、中学生や高校生と混じって、負けずに声援を送った。ペンライトやタオルマフラーを振り回す私は、第二の青春だった。

某月某日

入院中は、色々な人から励ましの手紙を頂いたり、差し入れを頂いたりした。自分は一人ではないと、励まされた。

そのお礼にと、私の通所する椎茸栽培の作業所に美味しい。私の感謝の気持ちが一緒に届けばと願っている。

絶対に許せない

神栖市 高木千代美

ある対応に怒りを覚え、又投稿させていただきました。

保護犬の柴犬(すみれちゃん)が、事故で二本足を失いながら、ボランテアに支えられて、懸

命に生きる姿を追った書籍「二本足のワンコすみれちゃん、生きる」が出版された。

保護犬すみれちゃんは、動物愛護センターで保護されていたが、譲渡会で飼い主さんが決まり引き取られました。

事故があつたのは、その直後のこと。飼い主の家を出て行方不明となり、市内の線路脇で大怪我をして倒れている所を警察官に保護されました。

不運が重なり、土曜日で市役所の担当者が休みだった為、飼い主が特定できず、すみれちゃんは「拾得物」として警察署で二日間過ごすことになり、治療も受けられず、水だけ与えられ、傷口には蛆が湧いていたと言います。

何かおかしくないか?!

治療を受けられずじやなくて、受けさせず、じやないのか。餌も与えられず、足を切断され瀕死の状態で苦しんでいる生き物に「拾得物」ではないだろう!

市の担当者が不在でも、飼い主が確認できなくても病院へ連れて行くことぐらいできないのか。警察の対応には残念でならない。

私も「羅門(ラモン)」という雑種の犬を飼っている。忘れもしない。4年前の夏、私の不注意で羅門は家から脱走し、夜になっても帰って来なくなり、心配していたところ、近所の人が来て羅門は事故に遭ったよう、と知らせて頂き慌てて現場に向かった。

羅門は、右の前足を骨折し、後ろ足を脱臼して歩行できない状態に居ました。運よく羅門のかかりつけの動物病院のスタッフが、近所に住まわっており、駆けつけてくれて、病院で緊急治療を

していただいた。その時、もう30分も遅かったら命はなかっただろうという。

羅門は、2週間寝たきり。3ヶ月毎日通院し、奇跡的に歩けるように回復しました。院長先生からは、本当に事故に遭った子とは思えない、と驚かれました。

今は元気に走り回っていますが、すみれちゃんの本を読みながら、全ての生き物の命の尊さを知ってもらいたいと願うばかりです。

《風の吹き》

腰越状

打田昇三

「腰越で武蔵気の無い墨を摺り」という江戸川柳がある。腰越(こしごえ)は鎌倉市南西部の七里ヶ浜に続く海岸で、中世には宿駅が置かれていたという。鎌倉時代の首都入口になる。文治五年(一一八九)夏には、奥州平泉で討たれた源九郎義経の首が此処で検証されたと伝えられる。

其の四年前の初夏、平家追討の大役を果たした義経は意気揚々と鎌倉に来て、凱旋將軍の様に迎えられる筈のところ、思いも掛けず兄の頼朝から勘気を受けて鎌倉入りが許されず、腰越に留められた。晴天の霹靂とも言える此の現状に驚いた義経は、頼朝の側近である学者の大江広元(毛利氏の祖)に宛てて頼朝への取り成しを頼む書状を書いた。是が世に言う「腰越状」である。

冒頭の川柳は、その時に墨を摺るように義経から言われた武蔵坊弁慶が、主君・義経の心中を察して怒りと落胆で仕方なく硯(すずり)に向かい重い気分を墨を摺った…とする見立てである。

古くから「判官顛頂(ほうがんびいき)」と言われるように、源義経は悲劇の武将として知られている。兄の頼朝が鎌倉に居ながらにして日本六十余州を手中にしたのに対して、頼朝の手足となり命懸けで各地を転戦し、平家追討を果たした義経が鎌倉入りを止められただけでは無く、諸国流浪の果てに奥州平泉で憤死させられる…其の結末には多くの同情が寄せられている。

異母弟の義経に対する扱いのように源頼朝は冷酷な人物のようだが、それは「氏族を統括し天下を治めてゆく為に必要な措置」と解する歴史学者も居られるとか、確かに一坪の領地も持たず一人の家臣も居なかった頼朝が、平家を倒し、日本全土を支配したのであるから多少は強引な手段を用いたことも分かるが、それにしても肅清された犠牲者は名の有る武将だけで百四、五十人と言うのは多すぎて「気の毒」と言うしかない。

源氏一門だけでも義経を初めとして源範頼・源行家・木曾義仲・一条忠頼・信田義憲・安田義定など著名な武将が消された。頼朝の長女・大姫の婿である清水冠義高などは木曾義仲の子と言う理由だけで殺されたし、旗揚げから参加していた千葉の豪族・上総介広常などは頼朝の武運長久を神前に祈願したのに謀反と誤解されて消された。

もともと兄弟とは言っても、頼朝の母は官位を持つ熱田神宮大宮司の娘であるし、義経の母・常盤は美貌ではあるが遊芸人であった。義経が赤子の頃、頼朝は父(義朝)や兄(義平)と平治の乱で戦っていたのである。黄瀬川の陣で対面する迄はお互いの顔さえ知らない間柄であったから義経が頼朝を兄として見る思いに対して頼朝は義経を半ばは家臣として見ていた。俗説では四国の平家

を討つために神戸から船出をする際に「逆櫓の論議」で言い争いになった梶原景時の讒言とも言われているが、そればかりでは無い筈である。

鎌倉に入れなかった義経は止む無く京都に戻り後白河法皇を頼るのだが、それは頼朝に逆らうことになる。諸国には未だ平家の残党も居り世情が不安な時期なので頼朝は大江広元の献策を容れ諸国に守護・地頭を置いた。常陸国も例外では無く、其の影響で大掾氏など官職に依っていた地方豪族の力が弱められてしまった。義経は、諸国を彷徨った末に奥州平泉に逃れ其処が最後の地となる。弁慶が案じたとおり源義経にとって「腰越状」が好運の手紙とはならなかったのである。

標準語の誕生

菅原茂美

このテーマは私の専門外ではあるが、シャヤリ出る事を許されたし。

ネット解説によると現在の日本には「標準語」を定義・規定する政府機関などなく、公式には標準語は存在しないという。しかし、現代東京口語を標準語とする事は、歴史的に暗黙の了解となっている。明治中期の頃、主に東京山の手教養層が使用する「山の手言葉」を基に、標準語を整備しようとする試みが推進され、更に文壇の言文一致運動が大きな影響を与え、標準語と呼ばれる言語の基礎が築かれた。そして当時、薩摩からは薩摩弁を、近畿地方からは関西弁を標準語にしろ!!との強い要求もあったという。戦後は各地の方言を見直す動きが現れ、国が特定の日本語を標準と規定する事に否定的考えが生まれ、NHKなどは

標準語を「共通語」と言い換えるようになった。

さて標準語の誕生に関し、NHKテレビの映像は、明治の初め江戸っ子の人力車夫と津軽からの客とが話を通じない。すると薩摩出身のお巡りさんが中に入ったが益々混沌。何しろ江戸末期には全国で藩の数は300余。それぞれにお国言葉がある。新しい日本が生まれたとはいえ、これじやどうにもならない。メダカの地方名は、日本で、なんと5000もあったという。

こういう時代にあつて、言語学者の上田萬年(かずとし・1867~1937・元東大文学部長・元国学院学長・「大日本国語辞典」を編纂。小説家田中文字の父・教え子に新村出・金田一京助ら)は、ドイツ留学から帰り、日本語が大きく動揺しているとき、西洋の言語学を積極的に取り入れ、夏目漱石・森鷗外・坪内逍遙などと力を合わせ、標準語や『仮名遣い』の統一に尽力した功績は甚大とされる。それまでの日本の背景は、識字率が高かったため、「書記言語」としては、漢文が伝統的に重んじられていたが、小説家などが「言文一致」を強く唱え、標準語形成に拍車をかける傾向にあつた。また、それまでの日本語は、平安時代の京都の貴族語に基づく文語体が標準的な書記言語として広く通用していた。口語言語についても、江戸後期までは、京言葉が「中央語」であり、京都を中心に新語が日本各地に伝搬していったとされる。『お寒うございます』なども、今でも違和感なく全国的に使われている。

そもそも標準語とは、歴史的には国家成立時に、国内の異なる言語話者同士のコミュニケーション円滑化・ひいては国家・国民を統一するため、主方言を基に、「国語」として形成されるものである。そして、多くは、方言及び少数言語は廃絶される

傾向にある。

なお、新しい日本語を統一する時、多くの意見があつた。まず文字は全て漢字にせよ。いや全て平仮名にすべきだ。ローマ字にすれば26文字で済む。結局漢字と平仮名を混ぜ合わせたものが一番良いとする意見が大勢を占めた。新しい日本語を作るという事は、新しい国家を作る事だ：として萬年らは、強力に推し進めたといわれている。

風と戯れて

木下明男



【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語
巻第五・(二一・二)

勸進帳(かんじんちょう)のこと

引き続きいて文覚の話になるので「いい加減に知ろ！」と言いたくはなるが、先に述べたように平家

物語の作者が、源頼朝の拳兵は文覚の勧めに依るもの（福原院宣）としているから、話が少し遠回りになることをご了承頂きたい。

京都に来てからの文覚は、右京区に在る高尾山神護寺に入って修行の日々を送っていた。此の寺院はかつて称徳天皇（孝謙女帝の重祚）の時代に和氣の清麻呂（藤原仲麻呂の乱に戦功があった）が建立した伽藍（寺院）であるが、時代の経過で衰退し荒れ果てていた。春は霞に立ち籠められ、秋には霧に覆われ、扉は壊れて落葉の下に埋もれ屋根の瓦は痛み、堂内の仏壇もさらに酷い状態に置かれていたのだが、住職が居なかつたから修理が行われることもなくて勿論、訪れる人も無く、稀に入るの僅かな日月の光のみ、と言う状態であつた。立ち寄つた文覚は余りの酷さに、何としても是を修造しようと思ひ立ち、寄付を貰う為の趣意書（勸進帳）を勝手に書いて、各地の旦那衆のところを回っていた。

既に触れたように或る時に後白河法皇の御所である法住寺殿に行つて家臣に勸進帳を示し、寄付を申し入れた。其の時に法皇は人を集めて歌舞音楽を楽しんでいたから家臣が取り次いでも不快な顔をされるだけで文覚のことは放っておかれた。

普通の者ならば諦めて帰るのであるが、生まれつき大胆不敵な文覚は、強引に御所内に入り込み後白河法皇の面前で大声に「仏の様な慈悲の心を備えた法皇が、此の請願を聞き届けて下さらぬ筈は無い！」と叫び、さらに勸進帳を広げて朗々と読み上げたのである。

「沙彌（しゃみ）修行中の僧、文覚が謹んで申し上げる。此の度、多くの方々のお助けを頂き高尾山の霊地に一院を建立して様々な人々が安楽に往生出来るよう祈りを捧げようと願っている。その為の寄進を頂

く勸進帳である。

思うに仮の現世に対して仏の道は真実であり広大無辺である。衆生と仏とを仮に区分しているが真理は一つである。因縁は避け難いが衆生が持つ仏心は月の光の如く清らかであるけれども、貪欲・瞋恚・愚痴（どんよく・しんに・ぐち）と増長・卑下・我慢・邪慢（ごうちよう・ひげ・がまん・じゃまん）四つの慢心がはびこり濁り切つた現世であれば、真実が此の世に現れることは無い。悲しいことには、仏の入滅が早すぎて生死の境を転ずる人間社会は暗く、いたずらに色に耽（ふけ）り酒に溺れる。本能に任せて道を外す者を禁制し迷いを正すことが出来る者が居るのであるか。この俣では民衆は地獄に落ちて閻魔大王に仕える獄卒の責めを免れない。

それを改めようと文覚は俗塵を打払つて法衣を身に付けたけれども悪心悪行が心に残つて苦しみ煩惱を断ち切るために修行を重ねて来た。然し、将来の為を思う言葉は中々、人に受け入れられて貰えない。釈迦牟尼仏が説かれた一千万巻の経文には仏が説かれた真実の教法が書かれており一つとして悟りの境地に達しないものは無い。其の為に此の文覚は世の僧と俗の諸人とに勧めた菩薩の修行を体得することが出来る霊場を高尾山に建てようと思ひ立つた。

彼の地は山高く、インドで釈迦が悟りを開いた霊鷲山に似ており、漢の国で四人の白髪の聖人が隠棲したと言ふ商山洞にも似ている。また清流が流れ自然豊かで猿が遊んでおり、俗世間に惑わされることも無い。正に仏天を仰ぎ、信仰一途の暮らしが出来た霊場である。その場所を整備し聖地とする為に、資金を奉加されんことを願う。目的・趣旨からしても是に賛同出来ない者は居ない筈である。ほのかに聞く。子供が戯れに砂で仏塔を築いても功德がある

と……まして紙一枚、銭半銭の寄進でも志は仏に通じる。願わくは万民の為に建立成就に協力せられることを……よつて、勸進修行の趣は、以上の通りである。

治承三年（一一七九）三月吉日

文覚

勝手な理屈に近いものもあるが、趣旨としてはまともな勸進帳であるから、或いは協賛してくれる者も居たとは思ふのだが、場所とタイミングが悪かつた。折から後白河法皇の御所では妙音院と呼ばれた太政大臣・藤原師長が下手な琵琶をカキ鳴らし、安察（あぜち）大納言源資方が拍子をとつて法皇が当時の流行歌を謡っていた。資方の子・右馬頭（うまのかみ）運輪（うんりん）高級官僚と侍従の藤原盛定が六弦の琴まで弾じていたから現代で言えば楽団付きでカラオケの練習をしていた様なもので有る。勿論、勤務時間中に……法皇はすっかり歌手気取りで何曲も歌っていた。

其処に入り込んだ文覚がマイク無しでカラオケに負けない大声を發して勸進帳を読上げたのであるから、どちらが悪いかは別にして是は怒られる場面である。法皇の歌も機械で採点が出来ない程に乱されてしまったから「カラオケの邪魔をしたのは、何者であるか。憎い顔を見せよ！」と叫ぶまでも無く、周りに居た警護の者の中で血気に逸る若い者たちが文覚に向かつていった。その中で新平判官資行という武士が一足早く走り出して文覚に近寄り「何と言う事を言つておるか！此方へ出て来い！」と叫んだ。この武士は巻第一の反平家鹿谷謀議にも参画していたらしいのだが、法皇の庇護で逃げて居られたらしい。それを知つていたかどうか文覚は資行を相手にせず「高尾の神護寺に莊園の一所所でも貰わぬうちは、此処を動かぬ！」と言つて、その場に固まつてしまつた。

そこで資行は文覚の首筋を捕らえようとしたのだが、文覚は勸進帳で資行の烏帽子を払い落してから拳（こぶし）で胸を突き上げたから資行はたまたらずに転がされ近くの大床の上に逃げ登った。

そうなるも勸進帳もカラオケ教室も御破算になり押し売りから暴徒に替わった文覚は、懐に隠し持っていた馬の尾で巻いた短刀を抜き出して戦闘態勢を整えたのである。そうは言っても本来は寄付を貰いに来たのであるから武器は勸進帳と短刀しかない。相手の法皇方も主要メンバーはカラオケ好きの公卿であるから原文に「…御遊もはや荒れにけり。院中の騒動なのめならず…」とあるが両者が戦っても大騒動の割には中身が無い。

其の中に御所の外で警備に就いていた信濃国の武士で安藤武者右宗（あんどどうむしやすけむね）と言う者が氣付いて「何事であるか！」と太刀を抜いて走り込んで来た。相手が弱くて拍子抜けしていた文覚は喜んで安藤に向かってきたのだが、安藤が見ると紙の勸進帳を武器にしている。安藤は「是は斬つてはま_まずい…」と感じて文覚の腕を峯打ちにしてから文覚が怯（ひる）むところを自分も太刀を捨ててレスリングに持ち込んだ。両者互角の戦いを展開する中に暴れていた時間の長い文覚が力負けして安藤に抑え込まれた。

結局、文覚は検非違使（警憲）に引き渡されたのだが、それでも法皇に対する悪口雑言を止めず恨み言を大声で繰り返し「寄付を呉れないのは法皇がケチだから仕方が無いが、此の文覚に対して酷い仕打ちをした事に対しては思い知らさなければならぬ。此の世は苦惱限りなく、「三界は皆、火宅」と言う。

王宮と言えども其の難を逃れることは出来ない。十善の帝位（前世に十の善業を施して天皇になったこと）を誇つ

たとしても、死んで後は（庶民と変わりなく）地獄の怪物たちに苛め（いじめ）抜かれること覚悟して置かれよ！」と、怒りを全身に現わしつつ叫び続けた。警察も最初は留置所に一晚泊めたくらいで釈放しようとしたのだが、余りにも言動が過激で騒がしいので牢獄に投じられてしまった。

どちらかと言えば文覚のほうは自業自得であるが、気の毒なのは騒動の巻き添えを食った人物で最初に向かつて行つて帽子をとばされてしまった資行判官は恥ずかしくて暫くは勤務にも就け無かった。それとは反対に文覚を負かした安藤武者は褒美に特別昇進をさせて貰った。通常は武者所の上席を経てから次の職に任官されるのに、法皇御所の警備員からいきなり右馬允（うまのじょう）国土交通省の係長級に抜擢された。

文覚の方も一応は刑務所送りになった訳であるが、一般の犯罪と違って仏様が関わるし、刑務所も態度の悪い囚人を扱うのは容易では無い。その頃に近衛天皇生母（鳥羽天皇皇妃）の藤原得子が亡くなったので、大赦という名目で文覚も自由の身になった。これで事件の経緯を反省し何処かの寺に落ち着けば良いのだが性懲りもなく勸進帳を振りかざして寄付集めを再開した。評判が良くないから寄付集めも思うようにはいかない。

それなのに大威張りの態度を改めようとせず、「此の世の中は乱れていて君（天皇）も臣民も、滅びてしまふであらう…」などと過激な発言を繰り返していたので、多分、後白河法皇の指示だと思ふのだが「この法師は危険人物であるから遠方へ流罪とせよ！」という達しが出て結局、文覚は伊豆国へ流されることになった。

その頃、後に以仁王を奉じて反平家の兵を挙げた

が敗れてしまふ源仲綱（巻第四「競のこと」に登場）が伊豆守であったから、文覚の流罪に伴う護送任務が仲綱に下されたようである。仲綱は東海道を陸路で送るよりも船便のほうが良いと判断して三名の下役に護送を命じた。下役というのは「放免」と呼ばれ、言うなれば囚人の中から選ばれて看守の代役をする連中である。文覚が法皇さえも恐れない人物であるとは知らずに、公然と賄賂（おいろ）を要求し「我々、警察関係の下級職員は、習慣として流罪の者を護送する際に『チップ』を貰うことになっている。お坊さんは遠い国に流されることになったのであるから、親類知人に品物や餞別を出して貰い―それを我らへの手土産にしなさい」と言った。

それを聞いた文覚は「生憎と、そう言う親類縁者は居ないが、東山の辺りに知人が居るから手紙を書こう。紙は無いか」という。放免たちが粗末な紙を探してくると「この様な紙に書けるか！」と怒って放り出した。それでは…と少し厚い常陸国産の鳥の子紙を探してくると、文覚は笑つて、「法師はやたらと手紙など書かぬ。私が言うからそれをお前たちが書け…」と威張っている。止むを得ず放免たちが筆を取ると、文覚が口を開いて「文覚は高尾の神護寺造立供養を志し、それを進めて居るほどに、今の様な（話の分らない）法皇の時代になつてしまひ、寄付を貰うどころか牢獄に投じられてしまった。その上に伊豆国に流されることとなり、遠路の為に役人に対するチップなどが必要になった。どうか、この使いの者に何かを与えてください」と言うので、その通りに書いて「さて、宛名は誰にするのか？」と聞くと、

「清水の観音へ、と書け」と答えた。放免たちが怒つて「下級職員でも我らは検非違使庁の役人である

ぞ。それを馬鹿にするのか！」と言えは「そう言われても、此の文覚は観音様を深く信仰している。他に誰を頼めというのだ！」と言いつけて相手にならない。結局、欲の深い役人たちは文覚にはぐらかされて賄賂は貰えなかった。

罪人としての文覚を乗せた船は阿野の津(三重県津市)を出港して遠州灘に差しかかったところで急に風が強くなり大波が立って、今にも船が転覆しそうに揺れ出した。舵取りや水夫たちは必死に操船して転覆を免れようとしていたけれども、風はいよいよ強く波は大きくなるばかりである。

船中の一同が或いは観世音菩薩の名を唱え、或いは南無阿弥陀仏の念仏を唱えていたのだが、文覚はこの大シケを物ともせず大酈(いびき)で寝込んでいた。その中に何を思ったのか、他の者が「これが最後！」と覚悟を決めたときに、ぱつと起き上がるや船の舳先に立ち、沖の方角を睨んで「龍王はお出でか！」と叫び出した。

勿論、龍王は返事をしなかったが、文覚は構わずに「是ほどの大願を起こした聖(ひじり)文覚自身のことの乗船を転覆させようとするのは何事であるか！直ぐにでも天帝の怒りに触れて(たとい神様でも)責任を取らされるぞ！それが分らぬか龍神ども！」と叫び続けた。その所為では無く、低気圧が去った結果であるうけれども、程なく波風が静まって船は伊豆国に着いたのである。

文覚は(流罪となって)京の都を出た日から心中に期することが有って「是から伊豆に流されるけれども)自分が都に戻って高尾山神護寺の造立供養という悲願を達成しない中は死ねない。もし其の願が虚しくなつたときは道端にて無駄死にすることで有ろう！」と覚悟を決めていた。都から伊豆まで順風とは言えな

かつたので浦伝い島伝いの航海であつたから日数が三十一日もかかった。

其の間は悲願達成の為に断食をしていたのに気力は少しも衰えず、船内で仏事に専念していた。誠に只人とは思えないことが多かつたのである。

福原院宣(ふくはらいんせん)のこと

平家物語には、嘘とは言い切れ無いが本当と言うには良心が咎めるような部分が多い。此の章段などもそうである。内容は伊豆に流されていた源頼朝が「平家追討の為に決起する」ことであり、次の章段が、源平両軍の最初の決戦「富士川」になるのであるから、此の章段も風雲急を告げる史実の記録として重要ではあるが、日記体ながら鎌倉幕府の半分は公式な記録でもある「吾妻鏡」に「福原院宣」の記事は無いのである。

院宣とは、上皇つまり隠居した天皇(院)に代わり(その意図を受けて)側近の者が出す文書のことであり、此の場合は院宣の趣旨が「平家を討て！」というものである。決起を洩る頼朝に対して文覚上人が手を変え品を変えて挙兵をさせる。その決め手に使われたのが福原から後白河法皇の近臣により発行された院宣という筋書きである。

その「福原院宣」が出された日付は治承四年七月十四日とされているが、吾妻鏡では同年の六月下旬には既に以仁王の令旨を受けた源頼朝が平家打倒の兵力集めを始めている。別に文覚が居ても居なくても、頼朝の挙兵は行われたことになるのであるが折角、平家物語に採用して貰った記事であるから黙って話を進めることにする。

後白河法皇を相手に無礼を働いた文覚は伊豆国に流罪となって近藤四郎国高と言う武士に預けられ奈古屋(現在の華山)に置かれた。源頼朝は北条氏の館に居たのであろうから場所は近い。二人が近づいても不思議では無い。そこで文覚は都の状況などを頼朝に語り「平家は、心が強く智謀に優れた大黒柱の重盛公を去年の八月に失い運命が衰亡に向かつております。今や源平両氏の中で將軍となるべき資質を備えた人物は貴方しか居られません。速やかに平家に反旗を翻(ひる)がえし、日本国中を従えさせ給え！」と申し入れた。

是に対して頼朝は遠慮深く、思慮深く「文覚殿は思いも寄らぬ事を申されますな。私は今は無き池禅尼殿に、生きていても仕方の無い様な命を助けられたのですから、其の後世を弔い(かつ源氏一族の供養をする為)毎日、法華経一部(巻)を読む他には何もしようと思つていません」と答えた。この返事は、自分が平家の命令を受けた地元武士たちに監視されていることを意識したものであろうけれども文覚は何しろ法皇にさえも気を使わない傍若無人の悪僧である。一段と声を大きくして「天の与えることを取らなければ却(かえ)って其の咎(とが)が(怒り)を受け、絶好の機会に其れを執行しなければ逆に其の災いを受けると；古書に書いてあります。この様な事を申すと心の中を試そうとするように受け取られるかも知れませんが、実はそうでは無く本当は貴方の事を思つている証拠として是をお見せします。良くご覧ください。」と言つてから懐に持っていた白い布に包んだ何やら怪しい物を取り出して頼朝の前に置いた。頼朝が「是は何か？」と問えば、文覚は勿体ぶつて語り出した。「是こそ、貴方のお父上、今は亡き左馬頭殿(源義朝)の頭蓋骨です。平治の乱で殺害さ

れた後に、獄舎の前に捨て置かれ苔の下に埋もれていて誰にも弔らわれることなく放置されていたのですが、此の文覚が思うところあり、牢獄の番人に話を付けて貰い受けたものです。

私は此の十余年間、是を首に掛け各地の山々、寺々を拝み回り弔い続けてきました。今は義朝公の魂も長い地獄の苦しみから解放されたことでしょう。その様にして、此の文覚は、今は亡き左馬頭様の為に尽くして来た者です……」

其処まで言われると頼朝も、其の首(骸骨)が父親のものであるとは思えないけれども、何となく懐かしく先ず父親の最後を想像して涙を流したのである。「平治物語」によれば尾張国(愛知県知多半島)まで逃げ延びた源義朝は家来筋の長田莊司忠致に裏切られて殺され首は死体と一緒に穴に埋められた……とある。頼朝も文覚の話を百%信用したとは思えないが、此処は文覚のクサイ芝居が功を奏したこととして話を進める。

謀反を進める文覚に対して「そもそも此の身は罪人として伊豆に流されたのであるから、天皇のお許しが無ければ此処を出て兵を挙げるなどということできない」と頼朝は言う。普通に考えれば頼朝の言う通り鼠が猫の首に鈴を着ける程度の難易度に思えるのだが「法律に従う」とか「規則を守る」とかいう選択肢が無い文覚の頭では「それは容易(たやす)いこと」になり「私が都に行き赦免して貰いましょう」と言い切った。

調子が良すぎるので自分の事より文覚のことが心配になった頼朝は「そうは言っても、貴僧も勅勘の(天皇の命令で処罰された)身では無いか……他人の罪を免じて欲しいなどと朝廷にお願いが出来る立場では無いと思うのだが?」と否定した。

すると文覚は「私の赦免を願うのであれば怒られると思いますが、貴方のことを願うのに何の問題も無いでしょう。今の都は福原ですから(京都では無く)行くのに三日が必要です。そこで院宣を受ける為に一日滞在して、伊豆へ帰ってくるまでに七日か八日あれば十分です……」と文覚流の計算で買物に行くような予定を示し、頼朝が止める間も無くその場から立ち去って行った。

罪人として流された身分なのに自由行動が出来るのは不思議だが、自分の居場所に戻った文覚は弟子たちに「熱海にある伊豆山神社に七日間、籠る」と言って出掛けた。急ぎの旅で福原の新都まで三日で上り、後白河法皇に仕える藤原光能が知人であったので先ず其処を訪ねた。此の人物は右兵衛督(うひょうえのかみ)右兵衛府の長官)などの要職に就いていたが、巻三「大臣流罪」で平清盛に免職されたから平家に恨みがある。

文覚は「伊豆国に流されている前兵衛佐(兵衛督の補佐)源頼朝の勅勘を許された上、法皇の院宣を頂ければ、関東八か国に居る源氏ゆかりの者たちを集め軍勢を催し平家を打ち滅ぼして天下を静める」と申し立てる。その手配を願いたい」と申し入れた。文覚は藤原光能が喜んでくれる、と思ったのだが期待に反して光能は困った顔をして小さな声で言った。「……それが、実は私も平家に官職を止められていて身動きが出来ず、誠に苦しい状態なのだ。それどころか法皇も押し込められていてお気の毒な有り様で言葉も無いが……とにかく法皇にお話して御意見を伺ってみる」と言って警備の兵士に気付かれないように後白河法皇の許に行き事情を報告した。法皇も、文覚の態度の悪さを知っては居るが、是を平家に向けさせれば面白いことになると考えて文覚の希望どおり

「平家打倒」の院宣を書いてくれた。

凶々しさも運のうちで、思惑どおりに法皇のお墨付きを手に入れた文覚は、是を大事に首に掛け予定通りに三日間で伊豆へ戻って来た。頼朝のほうは大ぼら吹きの坊主に扇動されて謀反に加わるような事になってしまったが、これが露見したならば、どんな目に遭うのかと心配し続けていた。それでも出発してから八日目の昼頃に文覚が現れて、スパーカーから帰って来たように「これが法皇の院宣よ!」と平家打倒の命令書を差し出した。

文覚と違って偉い人に弱い頼朝は院宣と聞いて手を洗い、口を濯ぎ、衣服を着替えて礼装になり、文覚が放り出すように渡した院宣を三度、拝礼してから徐(おもむろ)に開いた。それには現代では通じないが次の様に書かれていた。

「此の数年、平家は王室を軽視し侮辱して政治に私欲を挟み憚ることが無い。仏法を破滅させて朝廷を軽んじ、是を滅ぼす事さえ企んだ。我が王朝は神の国である。皇室の祖霊と並んで神徳が明らかである。その故に朝廷が政治を始めてから数千年の間、帝王の危機を企み国家を危ぶめる者は皆、敗北しないう者はいなかった。然らば即ち或いは神の援助により、或いは勅宣の趣旨に依って横暴を極める平氏の一類を誅し朝廷の怨敵を退治せよ。源氏の家に伝わる武芸の道を駆使し兵略を継ぎ、祖先から引き継がれた奉公の志をもつて忠勤を励み、身を建て家を起すべし。其の趣旨に添い院宣を下す。依つて是を執達すること此の通りである。治承四年七月十四日 前右兵衛督光能が承り前右兵衛佐殿へ謹上す」

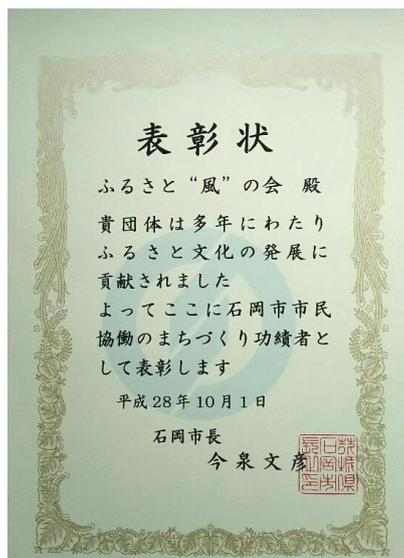
源頼朝は院宣を錦の袋に入れ石橋山合戦の時も首に掛けて戦ったと言われる「此の章段はその様に結んでいる。文覚を疑う訳では無いが七月十四日は高

倉天皇第四皇子の尊成親王(後鳥羽天皇)が生まれた日なので、後白河法皇が生意気な文覚に院宣など出している暇があったかどうか…。

(次の「富士川」は待望の源平合戦場面に入る)

(お知らせ)

十月一日、ふるさと風の会が、石岡市市民協働のまちづくり功績者として表彰を受けました。創刊から十年、多くの皆様の応援・励ましを頂き続けてこられましたこと、この場を借りて改めてここにお礼申し上げます。 会員一同



編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会も11年目に入りました。

当会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ことば座団員」&「朗読教室生徒」募集!!

劇団員の募集

ことば座は、霞ヶ浦を中心とした「ふる里物語」を朗読手話舞と朗読劇に表現する劇団です。ことば座では、スタッフ部門・俳優部門の団員を募集しています。

ふる里劇団に興味をお持ちの方の連絡をお待ちしています。

朗読教室生の募集

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることを言います。何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えてみませんか。演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。 月1回コース(受講料:¥6000円) 2回コース(受講料:¥9000円)

連絡先 080-3125-1307(白井)